



アート・アドベンチャー  
Art-tastic  
Adventure

国立新美術館ワークショップ記録集

2017年3月 - 2021年12月

やってみよう、アート

国立新美術館  
ワークショップ記録集

2017年3月-2021年12月

## 発刊によせて

国立新美術館では、「参加し交流し創造する美術館」をテーマに、様々な教育普及プログラムを実施してまいりました。展覧会に即した講演会や各種シンポジウム、アーティストが自作を語るアーティスト・トークの開催をはじめ、子ども向けの鑑賞ガイド、また、美術館そのものを楽しんでいただく建築ツアーや、若い人材の育成を目的とするインターンやボランティアの受け入れなどを行っています。

そして、当館が開館当初から力を入れてきた教育普及活動の根幹には、アーティストとともに幅広い視点からアートについて考え体験する、「アーティスト・ワークショップ」があります。その記録や、参加アーティストによるエッセイを掲載し、5年ごとに発刊してきた『やってみよう、アート 国立新美術館ワークショップ記録集』。開館15周年を迎えた本年、3冊目を発刊することができ、本記録集には67回目から94回目までのワークショップを掲載いたしました。

この5年間は、従来の事前申し込みによるアーティスト・ワークショップに加え、事前応募なしで参加できるプログラムも展開しています。また、アーティストではなく、教育普及室のスタッフによるプログラムや、建築ツアーから派生した株式会社日本設計のボランティアによる建築ワークショップも加わるなど、これまで以上に多様なプログラムを企画してきました。

一方、世界を席卷したコロナ禍によって、当館も臨時休館せざるを得ない状況が続いた2020年からは、オンラインを利用したワークショップ開催の模索を始め、ウェビナーや動画の発信にも力を入れてまいりました。はからずも、オンラインによる開催は、全国から参加者をつうることができたため、より多くの人々をつながれたように思います。教育普及活動にとって、パンデミックは対面での活動の制限を余儀なくされますが、その制限の中でもできることを模索し、人々とアートをつなげていく活動を、今後も展開してまいります。

最後になりましたが、ワークショップの講師を快く引き受け、素晴らしいプログラムをしてくださったアーティストのみなさまをはじめ、学生のインターンやサポート・スタッフ、機材・素材を提供くださった各社のみなさま、そして参加してくださったすべての方に心より感謝申し上げます。

2022年3月  
国立新美術館

## 謝辞

国立新美術館アーティスト・ワークショップの開催にあたり、講師各位ならびに株式会社日本設計、キヤノン株式会社ほか、多くの方々から多大なるご支援とご協力を賜りました。ここに記し、深い感謝の意を表します。また、ここにお名前を記すことができなかつた方々にも、心から御礼申し上げます。(順不同・敬称略)

### 講師

流麻二果

井上雅之

視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ

吉本直子

野又穂

赤羽美和

須藤玲子

大隅秀雄

原倫太郎+原游

坂田太郎

風間サチコ

三原聡一郎

東明

浅野暢晴

しりあがり寿

株式会社 日本設計社員有志

中里唯馬

PAN- PROJECTS (八木祐理子、高田一正)

## 美術館のご紹介

### 活動方針

国立新美術館は、芸術を介した相互理解と共生の視点に立った新しい文化の創造に寄与することを使命に、2007年、独立行政法人国立美術館に属する5番目の施設として開館しました。以来、コレクションを持たない代わりに、人々がさまざまな芸術表現を体験し、学び、多様な価値観を認め合うことができるアートセンターとして活動しています。具体的には、国内最大級の展示スペース(14,000㎡)を生かした多彩な展覧会の開催や、美術に関する情報や資料の収集・公開・提供、さまざまな教育普及プログラムの実施に取り組んでいます。

### 事業内容

#### 1. 展覧会事業—さまざまな芸術表現を紹介し、新たな視点を提起する美術館

- ・全国的な活動を行っている美術団体等に発表の場を提供します。
- ・さまざまな分野における新しい表現を紹介し、同時代の芸術の振興に努めます。
- ・現代にふさわしいテーマや知見に基づいて、さまざまな時代や地域の美術を紹介します。
- ・調査研究の成果を、多様な展示活動を通じて、分かりやすく普及していくことに努めます。

#### 2. 情報資料収集・提供事業—情報資料の収集・公開を通じて人と芸術をつなぐ美術館

- ・国内の展覧会に関する情報を収集し提供します。
- ・戦後の国内の展覧会カタログを網羅的に収集し公開します。
- ・日本の近代以降の美術に関するさまざまな資料を収集し公開します。

#### 3. 教育普及事業—参加し交流し創造する美術館

- ・展覧会にあわせた講演会やシンポジウム、ギャラリートークを実施します。
- ・作家トークやワークショップにより、アートを楽しみ、アートについて語りあうための場を提供します。
- ・インターンシップやボランティア・プログラムをとおして、美術館における実践的な活動の場を提供します。
- ・美術館の教育普及事業に関する資料の収集に努めます。

### 開館時間など

10時～18時(入場は17時30分まで) ※会期中の毎週金・土曜日は20時まで(入場は19時30分まで)  
休館日は毎週火曜日(祝日又は振替休日に当たる場合は開館し、翌平日休館。)

### お問い合わせ

独立行政法人国立美術館 国立新美術館  
<https://www.nact.jp>  
 Tel: 03-6812-9900

### アクセス

#### 電車

- ・東京メトロ千代田線乃木坂駅  
青山霊園方面改札6出口(美術館直結)
- ・東京メトロ日比谷線六本木駅4a出口から徒歩約5分
- ・都営地下鉄大江戸線六本木駅7出口から徒歩約4分



# 目次

発刊によせて	2
謝辞	3
美術館のご紹介	5
ワークショップリスト	8

## 2017年ワークショップ

67 2017年の日本の色を見つけよう	18
68 鼻ってどんなカタチ?—ジャコメッティになってみよう	20
69 視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ	22
70 サンシャワー—大学生ワークショップ	24
71 日々の亡霊	26

## 2018年ワークショップ

72 SKYSCAPES—空をめぐる想像の時間—	28
73 みんなでドローイングセッション! ○△□でおしゃべりしよう!	30
74 こいのぼりなう! ワークショップ	32
75 バランスっておもしろい! 風で遊ぶ 真夏の自由研究	34
76 手ぶらでブラっと工作室—オリジナル缶バッジをつくろう!—	36
77 影のメリーゴーランド	38

## 2019年ワークショップ

78 漆で作って、漆と暮らす	40
79 ぼんやり階級名刺をつくろう!	42
80 美術館の楽しみ方みつけ! ココ見てたんけん隊	44
81 鑑賞ワークショップ—みて・よんで・みる・イケムラレイコ展	46
82 マイ・こいのぼりなう!2019	48
83 手ぶらでブラっと工作室2019—オリジナル缶バッジをつくろう!—	50
84 六本木の美術館をたっぶり聞いてみよう—想像する音、創造する耳	52
85 カーテンの向こうに何がいる?—ゆうれいの世界をつくってみよう	54
86 視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ	56

## 2020年ワークショップ

87 どこまで“からだ”?—どんな“からだ”?—紙を使って大変身!	58
88 自分の分身!? 3本足の不思議な生き物マネックスターをつくろう!	60
89 しりあがり寿オンラインワークショップ—北斎と遊ぼう!	62
90 国立新美術館のヒミツ—地震から人と作品を守る工夫を知ろう!	64

## 2021年ワークショップ

91 マイ・こいのぼりなう!2021 オンライン	66
92 YUIMA NAKAZATO FASHION PROGRAM 10代と考える、ファッションと未来	68
93 PAN- PROJECTSとのオンラインセッション: 人の営みと物質をめぐって	70
94 視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ	72

## エッセイ

「まっすぐ」と「ぶらぶら」を歩き来する—林建太	76
ワークショップ雑感—須藤玲子	77
センス・オブ・ワンダー、そして夢中になることの素晴らしさ—大隅秀雄	78
影のメリーゴーランド—原倫太郎	79
「みんな」で作ったぼんやり階級名刺—風間サチコ	80
六本木の美術館をたっぶり聞いてみよう—想像する音、創造する耳—三原聡一郎	81

# ワークショップリスト

※ワークショップ1-29は、『国立新美術館ワークショップ記録集2007年3月-2011年2月』に収録。

	ワークショップタイトル／関連事業	講師／肩書き	開催日	対象	参加者数	場所
1	自分のシンボルマークを作ろう! 「教えて!可土和さん!」(講演会とワークショップの同時開催)	佐藤可土和 クリエイティブディレクター	2007.3.24	小学5,6年生	18名	別館3階多目的ルーム
2	からだを遊ぶ! 「スキン+ボーンズ—1980年代以降の建築とファッション」展 関連企画 ボーンズ編	楠原竜也 振付家・ダンサー	2007.7.29	小学3年生～6年生	11名	別館3階多目的ルーム、講堂、 企画展示室2Eほか
3	3Dな布(スキン)を作る 「スキン+ボーンズ—1980年代以降の建築とファッション」展 関連企画 スキン編	菱沼良樹 ファッションデザイナー/テキスタイルデザイナー	2007.8.4	どなたでも	22名	別館3階多目的ルーム
4	大学生とのワークショップ「アートまわりのおしゃべり—感じたこと、聞きたいこと」 「安齋重男の“私・写・録”1970—2006」展 関連企画	安齋重男 アート・ドキュメンタリスト	2007.9.23、30	大学生	23日 18名 30日 33名	別館3階多目的ルーム
5	学校のシンボルマークをつくろう 自分のシンボルマークをつくろう 「ADC大学」同時開催「高校生のためのデザインワークショップ」	松永真、中島祥文、浅葉克己、永井一史 アートディレクター	2007.10.20、21	高校生	20日 36名 21日 38名	別館3階多目的ルーム
6	わたしの家、わたしの服～着られるお家をつくろう～	山縣良和、mafuyu ファッションデザイナー、ニットアーティスト	2007.12.1	小学3年生～6年生	23名	別館3階多目的ルーム、 1階ロビー、地下SFTギャラリー
7	今日はちよっぴり画伯な気分～奥谷 博先生と描く美術館～	奥谷 博 画家	2008.1.27	小学4年生～中学3年生	12名	別館3階多目的ルーム、 企画展示室2Eほか
8	くんくんウォーク～美術館のにおいを探せ!～	井上尚子 アーティスト	2008.2.16	4歳以上	29名	別館3階多目的ルーム、 国立新美術館内
9	ヒューマンサイズ・プロジェクト～つくろう!自分サイズのバルーン!～ 「アーティスト・ファイル2008—現代の作家たち」展 関連企画	市川武史 現代美術家	2008.3.15、16	どなたでも	15日 19名 16日 27名	講堂、研修室A,B,C、竹林
10	空想の場所をつくってみよう 「アーティスト・ファイル2008—現代の作家たち」展 関連企画	さわひらき 現代美術家	2008.4.12	小学2年生～中学3年生	11名	別館3階多目的ルームほか
11	ミナ ペルホネンでつくる未来生活 プログラム「ミナ ペルホネンとデザイン」(講演会とワークショップの同時開催)	皆川明 デザイナー	2008.5.18	どなたでも	20名	別館3階多目的ルーム
12	鑑賞ワークショップ～ことばで楽しむエミリー展～ 「エミリー・ウングワレ展—アボリジニが生んだ天才画家」関連企画	白鳥建二	2008.7.6	どなたでも	22名	企画展示室2E、講堂
13	アイスベキモノたち～発見!おもしろデザイン!～	清水久和 プロダクトデザイナー	2008.8.24	小学生以上の親子	8組21名	別館3階多目的ルームほか
14	デザインってなんだろう??～やってみよう!イスのデザイン～	紺野弘通 プロダクトデザイナー	2008.9.28	小学生	29名	別館3階多目的ルームほか
15	六本木をつづる～散策を“手紙”にたくして～	秋山さやか 美術作家	2008.12.21	小学生以上	20名	別館3階多目的ルームほか
16	作ろう!オリジナル・モビール	藤城成貴 プロダクトデザイナー	2009.2.14	中学生以上	22名	別館3階多目的ルーム
17	ミニチュア・ムシワールド～虫からみた世界をつくろう～ 「アーティスト・ファイル2009—現代の作家たち」展 関連企画	大平 實 現代美術家	2009.3.8	小学生	17名	別館3階多目的ルーム、 企画展示室2E
18	石から生み出すいろいろなカタチ 「アーティスト・ファイル2009—現代の作家たち」展 関連企画	村井進吾 彫刻家	2009.4.5	小学4年生以上	18名	別館3階多目的ルームほか
19	やってみよう、美術体操～名画、名作を体感!～	高橋唐子 美術作家	2009.8.22	小学生	13名	別館3階多目的ルーム
20	チャレンジ!抽象画～向き合う心、あふれ出る色～ 「光 松本陽子/野口里佳」展 関連企画	松本陽子 画家	2009.9.12	どなたでも	21名	別館3階多目的ルームほか
21	とらえよう、レンズの向こう側～デジカメで撮る抽象写真～	浜田 涼 美術作家	2009.12.19	小学4年生以上	19名	別館3階多目的ルームほか
22	パラモデルといっしょにブラレールであそぼう	paramodel 現代美術家	2010.1.10	どなたでも	34名	3階講堂ほか
23	人形作家とつくる、オリジナルキャラクター	イシイリョウコ 人形作家	2010.2.27	どなたでも	22名	別館3階多目的ルームほか
24	傘をつかってアニメーションを作ろう 「アーティスト・ファイル2010—現代の作家たち」展 関連企画	斎藤ちさと 美術家	2010.3.20	中学生以上	15名	別館3階多目的ルーム

	ワークショップタイトル／関連事業	講師／肩書き	開催日	対象	参加者数	場所
25	カラー・ワイヤーでつくる小物	エリオット・ムキーゼ、ノンムプセレロ・マブンデュラ ワイヤーアーティスト	2010.4.24	どなたでも	24名(2回合計)	地下ロビー
26	木ってなんだろう? ～見て、聞いて、さわってみよう～	宮本茂紀 モデラー	2010.6.5	小学生	23名	別館3階多目的ルームほか
27	カラダで鑑賞! マン・レイさんの世界	伊藤千枝 ダンサー・振付家	2010.8.29	小学生	16名	別館3階多目的ルーム、 企画展示室1E
28	カメラでとらえよう 風のそよぎ 光のゆらぎ 「陰影礼讃—国立美術館コレクションによる」展 関連企画	秋岡美帆 現代美術家	2010.10.2	小学4年生以上	20名	別館3階多目的ルームほか
29	私の線を集めよう	金田実生 画家	2011.2.19	どなたでも	24名	別館3階多目的ルーム
30	暮らしを見つめる 粘土で作ってみる 「アーティスト・ファイル2011—現代の作家たち」展 関連企画	中井川由季 陶造形作家	2011.5.7	小学生以上	18名	別館3階多目的ルームほか
31	<small>どこほこ</small> 凸凹探検隊!～探そう、美術館のかたち～	酒百宏一 美術作家	2011.7.16	小学生以上	22名	別館3階多目的ルームほか
32	私だけの文様で作るSLEEVE BAG <small>スリーブバッグ</small>	高橋理子 アーティスト	2011.9.4	中学生以上	20名	別館3階多目的ルーム
33	デザインって何だろう?～展覧会の印象を色や形にしてみよう!～ 国立新美術館開館5周年記念企画	佐藤可士和 クリエイティブディレクター	2012.1.22	小学3年生～6年生	24名	別館3階多目的ルームほか
34	私の“好き”を箱に詰めて～廃品からつくる、アート～ 「野田裕示 絵画のかたち／絵画の姿」展 関連企画	富田菜摘、野田裕示 現代美術家、画家	2012.2.18	中学生以上	22名	別館3階多目的ルームほか
35	野ダテ△□～掛け軸に描いて、お茶室で鑑賞しよう!～ 「野田裕示 絵画のかたち／絵画の姿」展 関連企画	開発好明、野田裕示 美術家、画家	2012.3.24	中学生以上	14名	別館3階多目的ルームほか
36	息をとめて そっとさわって 銀箔から学ぶ日本の画材	神戸智行 日本画家	2012.5.27	小学5年生以上	21名	別館3階多目的ルームほか
37	からだと空間をめぐる実験～美術館の空間をからだで感じてみよう!～	岩淵貞太 ダンサー・振付家	2012.7.29	小学3年生以上	17名	1,2,3階ロビー、 3階講堂
38	“表現”としての写真 —柴田敏雄による2回の講評会— 「与えられた形象—辰野登恵子／柴田敏雄」展 関連企画	柴田敏雄 写真家	2012.8.25、9.8	高校生以上	17名	研修室A、Bほか
39	はじめてのアート—新聞紙をさわって、きいて、かんじてみよう—	福井江太郎 日本画家	2012.11.3、4	未就学児童(3～6歳)親子	3日 11組25名 4日 12組27名	別館3階多目的ルーム
40	高校生が写し出す、とむらいの時 「アーティスト・ファイル2013—現代の作家たち」展 関連企画	志賀理江子 現代美術家	2013.2.24	高校生	5名	別館3階多目的ルームほか
41	木々に灯す、ちいさな巣をつくろう～アートナイトでインスタレーションに挑戦 「アーティスト・ファイル2013—現代の作家たち」展 関連企画	國安孝昌 現代美術家	2013.3.23	高校生以上	19名	別館3階多目的ルーム、 屋外スペースほか
42	“ハウス・オブ・カード”をつかったワークショップ 「カリフォルニア・デザイン」展×「デザインあ展」共同開催プログラム	岡崎智弘、寺山紀彦 アートディレクター／グラフィックデザイナー、デザイナー	2013.4.27	「デザインあ展」来場者	2,250名	21_21 DESIGN SIGHT(東京)
43	『写真』以前／暗黒を作り出そう	ホンマタカシ 写真家	2013.7.28、8.4	高校生以上	16名	別館3階多目的ルームほか
44	あなたのユーモアをイラストにしよう!	JUN OSON イラストレーター	2013.8.25	小学3年生以上	16名	別館3階多目的ルームほか
45	はじめてのアート —つくって遊ぶ、劇ごっこ—	大森靖枝 演出家	2013.11.24	未就学児(2～6歳)親子	13組34名	別館3階多目的ルーム
46	折りジナルフェイスをつくろう! 「みる・さく・あそぶ イメージのカ ウィークエンド」特別プログラム	COCHAE 軸原ヨウスケ、武田美貴 デザイン・ユニット	2014.3.8	どなたでも	133名(3回合計)	1階ロビー
47	わたし みんな めぐる イメージ—世界のものと向き合おう— 「イメージのカ—国立民族学博物館コレクションにさぐる」展 関連企画	吉田憲司、齋藤玲子、山中由里子、上羽陽子、 長屋光枝、山田由佳子 文化人類学者、学芸員	2014.3.15、16	15日 中学生以上 16日 小学4～6年生	15日 22名 16日 8名	研修室A、B、企画展示室2E
48	鳥ならざる鳥を描く —逆から思考する、絵画— 「中村—美展」関連企画	中村—美 画家	2014.5.10	小学5年生以上	27名	別館3階多目的ルームほか

	ワークショップタイトル／関連事業	講師／肩書き	開催日	対象	参加者数	場所
49	2.5D 着られるイラスト バレエ・リュス ペーパーチュニックコレクション2014 「魅惑のコスチューム：バレエ・リュス展」関連企画	高木陽子ほか 文化学園大学教授	2014.7.26	小学6年生以上	15名	別館3階多目的ルームほか
50	アート de じぶんえほん	なかがわ ちひろ 絵本作家・翻訳家	2014.10.26	小学3年生～高校生	18名	別館3階多目的ルーム
51	はじめてのアート 絵描きさんといっしょに、描く、つくる!	堂本右美 画家	2014.11.22、23	22日 未就学児(3～6歳)親子 23日 小学1～4年生親子	22日①19組42名 ②21組47名 23日 20組48名	別館3階多目的ルーム
52	彫刻と絵画をめぐるワークショップ～4人の色／9回のコップ	富井大裕、近藤恵介 美術家、画家	2015.1.25	中学生以上	20名	別館3階多目的ルーム
53	動き出せ!色とかたち アニメーションのしくみを知ろう 六本木アートナイト企画「ニッポンのマンガ*アニメ*ゲーム」展、「ニキ・ド・サンファル展」さきどりワークショップ	東京工芸大学 芸術学部 アニメーション学科	2015.4.25	どなたでも	160名	1階ロビー
54	Life Type ライフタイプ—じぶん・ひと 知り合うデザイン	SPREAD 小林弘和、山田春奈 クリエイティブ・ユニット	2015.6.14	中学生以上	18名	別館3階多目的ルーム
55	マンガの時間を「見る」という体験：解放される音、分解される運動 「ニッポンのマンガ*アニメ*ゲーム」展 関連企画	鈴木雅雄、野田謙介 早稲田大学教授、マンガ研究家	2015.8.22	高校生以上	25名	3階研修室A,B
56	冷却ファンでつくる動きの装置	堀尾寛太 アーティスト・エンジニア	2015.9.27	小学3年生～高校生	8名	別館3階多目的ルーム、 3階講堂
57	かたちにして見る、わたしの考え～Made in Mind～ 「アーティスト・ファイル2015 隣の部屋—日本と韓国の作家たち」関連企画	ヤン・ジョンウク 現代美術家	2015.10.11	中学生以上	20名	3階講堂、 企画展示室2E
58	はじめてのアート ふわふわおえかき ブッシュしてポヨン!	開発好明 美術家	2015.11.15	未就学児(3～6歳)親子	90名(4回合計)	1階ロビー
59	鉄・形・音 手と目と耳を結ぶ	金沢健一 彫刻家	2016.1.31	中学生以上	14名	別館3階多目的ルーム
60	ゾートロープを作ろう 「ニッポンのマンガ*アニメ*ゲーム ミャンマー展」関連企画	武中敬吾、野本有紀、木島彩矢香、吉澤菜摘 アニメーター、教育普及室スタッフ	2016.2.14、15	どなたでも	81名	ミャンマー国立博物館(ヤンゴン)
61	新聞紙とガムテープのアートを体験しよう! 「MIYAKE ISSEY展：三宅一生の仕事」関連企画	関口光太郎 造形作家	2016.4.17	小学生以上	52名	1階ロビー、 企画展示室2E
62	Tipping Pointをふくむ事象について、ヴィジュアルによる試論	升谷絵里香 アーティスト	2016.5.29	中学生以上	12名	別館3階多目的ルーム
63	三角形で発信しよう!	国立新美術館 教育普及室スタッフ	2016.8.11	どなたでも	51名	地下1階休憩コーナーほか
64	ゾートロープを作ろう(バンコク編) 「ニッポンのマンガ*アニメ*ゲーム バンコク展」関連企画	国立新美術館 教育普及室スタッフ	2016.8.27、28	どなたでも	27日 45名 28日 44名	ナショナル・ギャラリー(バンコク)
65	ひろがるワタシ つながるアナターパラフークの世界へようこそ— 六本木アートナイト企画 アーティスト・ワークショップ	東 明 美術作家	2016.10.22	どなたでも	180名	1階ロビー
66	Next 10 years ～色と形でデザインするわたしの未来～ 「国立新美術館開館10周年記念ウィーク」特別プログラム	SPREAD 小林弘和、山田春奈 クリエイティブ・ユニット	2017.1.29	中学生以上	19名	別館3階多目的ルーム、 企画展示室2E
67	2017年の日本の色を見つけよう	流麻二果 アーティスト	2017.3.4	中学生以上	16名	別館3階多目的ルーム
68	鼻ってどんなカタチ?—ジャコメッティになってみよう 「ジャコメッティ展」関連企画	井上雅之 陶芸家	2017.8.11	小学4年生以上の親子	9組18名	別館3階多目的ルーム、 企画展示室1E
69	視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ 「サンシャワー：東南アジアの現代美術展 1980年代から現在まで」関連プログラム	視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ	2017.9.9	どなたでも	26名(2回合計)	企画展示室2E、 3階研修室A,B
70	サンシャワー 大学生ワークショップ 「サンシャワー：東南アジアの現代美術展 1980年代から現在まで」関連プログラム	国立新美術館 吉澤菜摘(進行役)	2017.9.18	東南アジア出身で日本に留学中の大学生・大学院生、日本出身の大学生・大学院生	14名	企画展示室2E、 別館3階多目的ルーム
71	日々の亡霊 「六本木アートナイト2017」関連企画	吉本直子 アーティスト	2017.9.30	小学4年生以上	9名	別館3階多目的ルーム、 1階ロビー
72	SKYSCAPES—空をめぐる想像の時間—	野又穂 美術作家	2018.3.18	中学生以上	23名	別館3階多目的ルーム

	ワークショップタイトル／関連事業	講師／肩書き	開催日	対象	参加者数	場所
73	みんなでドローイングセッション! ○△□でおしゃべりしよう!	赤羽美和 グラフィックデザイナー、テキスタイルデザイナー	2018.3.24	どなたでも	74名(3回合計)	1階ロビー
74	こいのぼりなう! ワークショップ 「こいのぼりなう! 須藤玲子×アドリアン・ガルデル×齋藤精一によるインスタレーション」関連プログラム	須藤玲子 テキスタイルデザイナー	2018.4.29	小・中学生とその保護者	44組119名(2回合計)	第1回:3階研修室A,B 第2回:3階講堂
75	バランスっておもしろい! 風で遊ぶ 真夏の自由研究	大隅秀雄 彫刻家	2018.8.11	小学4年生以上の親子	9組18名	別館3階多目的ルームほか
76	手ぶらでブラっと工作室—オリジナル缶バッジをつくろう!—	国立新美術館 教育普及室スタッフ	2018.8.19	どなたでも	108名	1階ロビー
77	影のメリーゴーランド	原倫太郎+原游 美術家	2018.12.1	未就学児(3~6歳)とその保護者	23組63名(2回合計)	3階講堂、展示室1B
78	漆で作って、漆と暮らす	坂田太郎 漆芸作家	2019.1.14	中学生以上	14名	別館3階多目的ルーム
79	ほんやり階級名刺をつくろう!	風間サチコ 美術家	2019.2.17	小学5年生以上	18名	別館3階多目的ルーム
80	美術館の楽しみ方みつけ! ココ見てたんけん隊	国立新美術館 教育普及室スタッフ(進行役)	2019.3.3	小学3~6年生	9名	3階研修室A,B、 館内各所
81	鑑賞ワークショップ みで・よんで・みる・イケムラレイコ展 「イケムラレイコ 土と星 Our Planet」展関連プログラム	国立新美術館 教育普及室スタッフ(進行役)	2019.3.16	どなたでも	4名	企画展示室1E
82	マイ・こいのぼりなう! 2019	国立新美術館 教育普及室スタッフ	2019.4.21	どなたでも	222名	1階ロビー
83	手ぶらでブラっと工作室2019—オリジナル缶バッジをつくろう!—	国立新美術館 教育普及室スタッフ	2019.7.21	どなたでも	122名	1階ロビー
84	六本木の美術館をたっぶり聞いてみよう—想像する音、創造する耳	三原聡一郎 アーティスト	2019.8.12	小学3年生以上	21名	別館3階多目的ルーム、 美術館敷地内各所(屋外含む)
85	カーテンの向こうに何がある?—ゆうれいの世界をつくってみよう 「クリスチャン・ボルタンスキー - Lifetime」関連イベント	国立新美術館 教育普及室スタッフ(進行役)	2019.8.18	小・中学生とその保護者	26名	3階講堂、企画展示室2E
86	視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ 「話しているのは誰? 現代美術に潜む文学」展関連プログラム	視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ	2019.10.6	どなたでも	24名(2回合計)	企画展示室1E
87	どこまで“からだ”? どんな“からだ”? 紙を使って大変身!	東明 美術作家	2020.1.26	小学生以上のご家族	14名	別館3階多目的ルーム
88	自分の分身!? 3本足の不思議な生き物マネックスターをつくろう!	浅野暢晴 彫刻家	2020.2.23	中学生以上	17名	別館3階多目的ルームほか
89	しりあがり寿オンラインワークショップ 北斎と遊ぼう! 「古典×現代2020—時空を超える日本のアート」関連イベント	しりあがり寿 漫画家	2020.8.15	小学4年生~中学3年生(参加) どなたでも(ライブ視聴)	8名(参加) 74名(ライブ視聴)	オンライン開催
90	国立新美術館のヒミツ—地震から人と作品を守る工夫を知ろう!	株式会社 日本設計社員有志	2020.9.22	小学3年生以上	55名(2回合計)	展示室3Bほか
91	マイ・こいのぼりなう!2021 オンライン	国立新美術館 教育普及室スタッフ	2021.4.29	どなたでも	20組40名(2回合計)	オンライン開催
92	YUIMA NAKAZATO FASHION PROGRAM 10代と考える、ファッションと未来	中里唯馬 ファッションデザイナー	2021.8.22	中学生・高校生(参加) どなたでも(ライブ視聴)	5名(参加) 55名(ライブ視聴)	オンライン開催
93	PAN- PROJECTSとのオンラインセッション: 人の営みと物質をめぐって PAN- PROJECTS《The Matter of Facts》関連イベント	PAN- PROJECTS 八木祐理子、高田一正 建築家ユニット	2021.11.5、12	高校生以上	10名	オンライン開催
94	視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ 「庵野秀明展」関連プログラム	視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ	2021.12.14	どなたでも ※手話通訳つき	31名(2回合計)	企画展示室1E、 1階ロビー

2017年

|

2021年

【凡例】

各ワークショップの説明は以下の者が執筆し、  
「まとめ」の文末に大文字のイニシャルで記した。

今井祥子 (SI)

浦有希 (YU)

大岩郁穂 (IO)

澤田将哉 (MS)

高橋梨佳 (RT)

真住貴子 (TM)

森崎由衣 (YM)

山際真奈 (MY)

吉澤菜摘 (NY)

渡部名祐子 (NW)



## 2017年の日本の色を見つけよう

- 開催日時：2017年3月4日(土) 13:00~16:30
- 参加者：16名
- 対象：中学生以上
- 参加費：1,000円
- 場所：別館3階多目的ルーム
- 協力：株式会社中川ケミカル

概要  
アーティストの流 麻二果さんと「2017年の日本の色」について考え、透明色のシートを使って自分の「日本の色」を作るワークショップを行いました。



プログラムの流れ

- 1 30分
- 2 15分
- 3 30分
- 4 70分
- 5 45分

### レクチャー

講師の流さんは日常ですれ違う人々や日本の自然をテーマに、カンヴァスの上に様々な色を何層も重ねて、繊細で奥深い色彩の絵画を制作しています。スライドによるこれまでの活動紹介の中で、港区立麻布図書館の色彩計画の際に使用した日本の伝統色や「襲の色目(かさねのいろめ)」について説明があり、「2017年の日本の色」を考える今回の企画が生まれたきっかけが語られました。今回、外国人に紹介したい日本の色、今の自分の気分を表す日本の色、こうあってほしいという未来を彩る日本の色など、今の日本の色を考えていきます。

### ウォーミングアップ

色を考える前に、自分自身が今どのように日本を捉えているのかを考える時間です。自分にとっての「日本の色」につながるテーマやキーワードをワークシートに沿って書き出していきます。参加者は初めは何を書けばいいのか迷っていた様子でしたが、流さんが季節の行事や雨上がりの空、虫の声といった例を挙げると、思いついたように鉛筆を動かすはじまりました。

### 「日本の色」の制作

次に、用意された14色の透明色のシートの中から3色を選んで重ね、「日本の色」をつくります。先ほど決めたテーマやキーワードに合わせて色を選び、重ねます。参加者は流さんが港区立麻布図書館の色彩監修に携わった際に制作した色のサンプルを参考にしながら、重ねる順番を変えてみたり、色の組み合わせを変えてみたりします。重ね方の違いによる色の変化を楽しみながら、何度も試行錯誤して本当に納得のいく色を探ります。①②

### キューブの制作

「日本の色」に使う3色が決まったら、3色のシートを透明なアクリルキューブに貼る難しい作業に移ります。6面のうちから貼る面を選び霧吹きで水をかけながら、ホコリや気泡が入らないようにシートを一枚一枚慎重に貼りつけました。立方体のキューブを通して見る色は、貼った面や見る角度により、シートを重ねたときの色とは違った表情となります。③

### 発表

最後に、参加者が選んだ3色のシートを重ねた「日本の色」とアクリルキューブを並べて、それぞれのテーマやキーワード、色を選んだ理由などを発表しました。参加者同士でテーマが被っていてもそれぞれの視点が異なり、完成した色は全く違います。自分が見た景色や感じている季節、人生、直面している問題などを表現した、2017年の色々な「日本の色」が生まれました。④



アーティスト  
**流麻二果**  
(ながれ まにか)

講師

大阪生まれ、香川県育ち。女子美術大学芸術学部絵画科卒業後、文化庁新進芸術家在外研修員(2002年)、ポーラ美術振興財団在外研修員(2004年)。日本の自然や、日常ですれ違う他者への興味をテーマに絵具を幾層にも重ねた色彩豊かな油彩画を制作。「VOCA展」(上野の森美術館、2000年・2006年)、「高松コンテンポラリーアート・アニュアルvol.05『見えてる風景/見えない風景』」(高松市美術館、2016年)、「Re construction再構築」(練馬区立美術館、2020年)などに出演。近年は建築空間の色彩監修やパブリックアートの制作、アパレルブランドやダンサーとのコラボレーションなど、絵画の可能性を開拓すべく幅広く活動している。被災地の子もたちにアートを届ける非営利団体「一時画伯」発起人。

まとめ

制作後、机に並べられた「日本の色」のキューブには、お気に入りの景色や直面している問題、東京の街など、参加者それぞれが導き出したテーマが反映されて、一つとして同じ色はありませんでした。2017年の日本や、そこで暮らす自分について考えながら、ひたすら色と向き合った参加者の色々な「日本の色」を通じて、今の日本の様々な姿が映し出されるワークショップとなりました。ワークショップ終了後、参加者が作った「日本の色」は、美術館の1階ロビーで展示・公開されました。⑤(YM)

参加者の感想

- 3色のシートを使っただけのキューブ作成、とてもおもしろかったです。色の組み合わせで、こんなにも見え方が違うとは驚きでした。(30代男性)
- 日頃身の周りにあふれている色について改めて考えることで、色の組み合わせだけでなく日本についてという広いテーマでの考えを深めることができた。(20代女性)
- 集中して日本と色について考える機会を持ったのは新鮮でした。「日本の色」は今まで感覚的に固まっていたので、それを解き放つことができ楽しかったです。(40代女性)
- テーマを考えながらの色選びはとても難しかったです。楽しかったです。又、他のみなさんの色とテーマ、考えが聞けた事はとてもおもしろかったです。(40代女性)

材料

- ・透明色のシート(14色で1セット) ・色見本
- ・白画用紙 ・ワークシート ・記録票 ・鉛筆
- ・消しゴム ・白手袋 ・アクリルキューブ ・カッター
- ・カッターマット ・定規 ・スキージ
- ・霧吹き ・タオル



## 鼻ってどんなカタチ?—ジャコメッティに なってみよう

「ジャコメッティ展」関連企画

- 開催日時：2017年8月11日(日)13:00~17:00
- 参加者：9組18名
- 対象：小学4年生以上の親子
- 参加費：無料
- 場所：別館3階多目的ルーム、企画展示室1E

概要

井上雅之さんを講師に迎え、自分の鼻をモチーフにした造形を楽しみながら、ジャコメッティの制作に対する考え方を追体験するワークショップを開催しました。



1

15分

### レクチャー

最初に井上雅之さんから、今回のワークショップタイトルにある「ジャコメッティになってみよう」は、ジャコメッティの真似をしようという意味ではなく、ジャコメッティの物の見方を考えながら、ジャコメッティがやったように、形をつくるというねらいがあるというお話がありました。

2

25分

### ジャコメッティ展の鑑賞

次に、参加者全員で「ジャコメッティ展」を鑑賞しました。親子で展示してある作品をじっくり観察しながら、これから制作する作品のイメージを膨らませていきます。①

3

80分

### 自分の鼻をモチーフにした制作

別館に戻り、自分の鼻をテーマにした作品をダンボールやグルーガンを用いて制作します。ジャコメッティの作品《鼻》を例に挙げながら、井上さんから「鼻ってなんだろう?」「どこからどこまでが鼻かな?」と問いかけられた参加者は、普段無意識のうちに「鼻」と認識しているものが、いかにあやふやなものかということに気づき、自分の鼻についてあらためて考えました。じっくりと手鏡で自分の鼻を観察する子ども達に比べ、大人はほとんど手鏡を見ることなく制作に取り組んでいました。この違いがどのようにならわれてくるのでしょうか。②

4

15分

### みんなで鑑賞

作品が形になってきたところで、一度みんなで鑑賞します。子どもが作った鼻は比較的小さく実物大、大人が作った鼻は大きく技巧的な作品が多い傾向が見られました。なぜこの大きさで作ったのか参加者に尋ねてみると、子どもは「自分の鼻が大きいとかっこ悪い。小さい鼻が美人。」と答え、大人からは「自分の理想とする鼻を作りたいから、高くて筋の通ったきれいな形の鼻を作りたい」などの答えが返ってきました。

5

30分

### 制作したものを別の方法でとらえてみる

次に制作した作品を使い、もの捉え方について考えます。ジャコメッティは、絵を描いてから彫刻を作りますが、今回のワークショップでは、逆に制作した作品を絵にすることに挑戦しました。作品にカーボン紙とA3の画用紙を被せて、形状を写し取ります。写した痕跡を元に、鉛筆でドローイングを加えて、模様を鼻とわかるようにする試みです。③④

6

### 講評

最後に、参加者全員の作品を並べて、講評を行いました。井上さんから「自分がやったことは何だったのか問いかけることが大事。作品を作ったすぐは自分が行ったことがわからないかも知れないけれど、後日時間を置いてから見返すことは大事なこと。」という言葉が送られ、ワークショップは終了しました。⑤



陶芸家

井上雅之

(いのうえ まさゆき)

講師

1957年神戸生まれ。1985年に多摩美術大学大学院美術研究科修士課程修了。2006年より多摩美術大学美術学部工芸学科教授。井上は大学で油画を専攻しますが、在学中に陶芸のロクロ制作に出会います。それは手の中で形が生まれる事の発見でした。成形制作過程で現れる亀裂や破砕された欠片に興味を持ち、以後、陶による大規模な立体作品を制作していきます。代表的な展覧会には、「ジャパニーズスタジオクラフツ展」(ヴィクトリア&アルバート美術館、イギリス、1995)、「大地の芸術クレイワーク新世紀」(国立国際美術館、2003)、「革新の工芸 -伝統と前衛-、そして現代-」(東京国立近代美術館 工芸館、2016)などがあり、国内外の企画展を中心に発表を続けています。

まとめ

参加者たちは、ジャコメッティが「見えるもの、見えるとおりに表現しようとしていたこと」を知り、ジャコメッティがどのように世界を覗いていたのかを理解していきました。4時間に及ぶワークショップを通して考えてきた内容を上手く自分の中に残し、次の美術鑑賞の際に今日体験した内容を役立ててもらいたいと思います。(MS)

参加者の感想

- 学校では子どもたちが横並びになりがちなのですが、今回は自由にやっていたのでよかったです。親と子どもを分けたのもよかったですね。(40代男性)
- 自分の鼻をいろんな物を使って作れて楽しかった。また、いろんな人の考えた鼻を見て良かった。みんな別々の考えで面白かったです。(11歳女子)
- 「鼻」というものは普段あまりよく意識していませんが、本日のワークショップに参加することを通して、改めて「鼻」はなんなのか鼻の造形はなぜこんな形なのかなど色々考え直してみました。とても楽しかったです。(20代女性)
- はじめて自分の鼻に気づきかけが、作れてよかったです。気になる・気づくということで、よくわかるきっかけになりました。(10歳男子)

材料

- 鉛筆 ・はさみ ・定規 ・ダンボール ・クラフト紙
- 紐 ・グルーガン ・手鏡 ・手袋 ・A3画用紙
- カーボン紙 ・キッチンペーパーなど



2

## 視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ

「サンシャワー：東南アジアの現代美術展 1980年代から現在まで」関連プログラム

- 開催日時：2017年9月9日(土) 13:00~15:00、17:00~19:00
- 参加者：26名(第1回13名、第2回13名)
- 対象：どなたでも ●参加費：無料(ただし、企画展観覧券が必要)
- 場所：企画展示室2E、3階研修室A,B
- 協力：視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ

### 概要

東南アジアの現代美術を紹介する「サンシャワー」展の関連プログラムとして、「視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ」を開催しました。



1



3



4



5

プログラムの流れ

1  
20分

### はじめに

このワークショップでは、障がいの有無、見え方、考え方などさまざまな違いを持った人が、7人程度のチームとなって「サンシャワー」展を鑑賞し、作品や展示空間について「見えていること」や「見えていないこと」を言葉にしなが、お互いに印象や感想、考えを語り合いました。「視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ」のみなさんに協力いただき、2回実施しました。

### 展示会の概要説明、参加者の自己紹介

研修室に集まった参加者は2つのグループにわかれて着席し、視覚に障害を持つナビゲーターとおしゃべりしながら、ワークショップの開始を待ちました。

ワークショップが始まると、東南アジアの現代美術を紹介する「サンシャワー」展の概要の説明に続いて、「視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ」の林さんから、「今日は、形・色・大きさなど『見えていること』と、印象・感想・解釈などの『見えていないこと』を言葉にして語り合おう」とお話がありました。①

その後はグループごとに参加者全員が自己紹介をして、いよいよ展示室へ向かいます。

2  
75分

### 「サンシャワー」展の鑑賞

展示会の会場内には、多民族、多言語、多宗教の東南アジア地域の多様な美術表現が展開されています。会場に入った2グループは、FXハルソノ《声なき声》、リー・ダラプー《伝令》、マーイ・チャンダーウォン《戦禍》、ヤスミン・ジャイディン「私物のコレクション」、アングン・ブリアンボド《必需品の店》などを鑑賞しました。参加者たちは様々な社会背景のもとで生まれてきた作品を前に、驚いたり戸惑ったりしながらも、見えていることや感じていることを言葉で表現し、他の参加者の声にも耳を傾けました。②③④⑤

3  
15分

### ふり返り

「サンシャワー」展をじっくり鑑賞して語り合った後、研修室へ戻り、グループごとに印象に残った作品や、対話しながら鑑賞して思ったことを話し合いました。展示室での時間ですっかり打ち解けた参加者たちは、他の人の言葉に大きく頷いたり、ユニークな感想に対して笑い声があがったり、終了時間が来ててもまだまだ話し足りなさそうな様子でした。



## 視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ

林建太(はやし けんた)  
鄭晶晶(てい じんじん)  
木下路徳(きのした みちのり)  
瀬戸洋平(せと ようへい)  
中島佑輔(なかじま ゆうすけ)

講師

2012年始動。スタッフは視覚障害者と晴眼者で構成されている。月一回のペースで全国の美術館や学校で目の見える人、見えない人が言葉を介して「みること」を考える鑑賞プログラムを企画運営している。最近の主な活動は2017年から継続している東京都写真美術館での鑑賞プログラムや、演劇の俳優大石将弘(ままこと、ナイロン100℃)らと制作した「きくたびプロジェクト 横浜美術館編」など。2020年以降は主にオンラインの鑑賞プログラムを通して、芸術へのアクセシビリティや「みること」について誰もが気軽に安全に語り合える場づくりを目指している。

まとめ

「サンシャワー」展の関連プログラムとして開催されたこのワークショップは、「視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ」の団体のみなさんと共同で企画、実施しました。参加者は視覚に障害がある「ナビゲーター」を含めた7人程度のグループになって一緒に「サンシャワー展」を鑑賞し、印象や感想を自由に語り合いました。参加した人の年齢や職業、障がいの有無、生活習慣、物の見え方、考え方などは一人一人違います。様々な違いを持った人同士が作品の前で時間をかけて対話を重ねることで、自分とは違う他者の感じ方を知るとともに、現代美術に対する多様な視点を共有するワークショップとなりました。(NY)

参加者の感想

- 自分一人では感じられない厚みのある鑑賞ができました。《声なき声》でキャプションを見て理解するというのではなく、印象からはじまり、知識、想像という過程を経て得た感動を実感できてとても良かったです。(20代女性)
- 小集団で同じものを対象にしなが違うことを感じ、そこから気づきを得られた。一人で見たら(A)にしか見えなくても、他の人が(B)と見立てたときに自分にはAともBとも違う(C)とも考えられるのが面白い体験。(30代男性/視覚障害)
- 自分の見えているもの、見えていないものを自分の言葉、感覚で話すだけでは、共有、理解して頂くのは難しいと感じた。言葉の選び方、表現することの奥深さを痛感しました。(50代女性)
- 複数人と話をしながら展示物を鑑賞する機会が少ないため、新鮮な気持ちで参加することができました。「見えているもの」と「見えていないもの」をそれぞれ言葉にして説明することで自分が普段では見過ごしてしまいうような点が発見することができると感じた。(19歳男性/肢体不自由)



1

## サンシャワー 大学生ワークショップ

「サンシャワー：東南アジアの現代美術展 1980年代から現在まで」関連プログラム

- 開催日時：2017年9月18日(月・祝) 11:00～16:00
- 参加者：14名
- 対象：東南アジア出身で日本に留学中の大学生・大学院生、日本出身の大学生・大学院生
- 参加費：無料 ●場所：企画展示室2E、別館3階多目的ルーム

概要

東南アジア出身の学生と日本出身の大学生と一緒に「サンシャワー展」を鑑賞し、それぞれの視点からとらえた東南アジアの現代美術について語り合うワークショップを開催しました。



2



3



4



5

プログラムの流れ

1

35分

### はじめに

「サンシャワー」展は、日本ではまだまだ知られていない東南アジアの現代美術を紹介する展覧会です。開催を機に、日本と東南アジアの若者たちが美術を通じて交流する機会を設けたいと考え、東南アジア出身の学生と日本出身の大学生が展覧会を鑑賞するワークショップを実施しました。

### ウォーミングアップ、展覧会の概要説明

ワークショップにはインドネシア、マレーシア、タイからの留学生4名と、一般公募の日本人学生10名、さらに国立新美術館のインターンやサポート・スタッフの学生・留学生が参加し、4チームにわかれて鑑賞やディスカッションを行いました。集合したら、まずは自己紹介を兼ねたウォーミングアップです。多目的ルーム内にある物の中から、気になる物一つを選んで、選んだ理由を話しながら自己紹介をします。①自己紹介の後は、進行役から「サンシャワー」展に関する簡単な説明がありました。

2

60分

### 「サンシャワー展」鑑賞①

別館から展示室に移動して、1回目の鑑賞の時間です。チームごとに対話しながら、様々な表現・手法の作品を鑑賞していきます。作品の外見的特徴だけでなく、作家の母国の社会情勢や宗教儀式、各国の若者の関心事などにも話題が及び、特に参加している留学生の出身地の作品の前では、交換する情報量が多く、会話が盛り上がっていました。②

3

65分

### 昼食、鑑賞①のふり返し、共有

1時間程度鑑賞した後、別館の多目的ルームへ戻り、昼食を食べながら印象に残った作品について話し合いました。気になった作品については、展覧会図録やインターネットで情報を集めました。また、多目的ルーム内の壁には、東南アジアの国・地域に関する基本情報を掲載した紙が掲示されていて、それらを見ながら語り合う参加者の姿もありました。③

4

60分

### 「サンシャワー展」鑑賞②

昼食休憩後、2回目の鑑賞を行いました。チーム内で相談して鑑賞する作品を決めて、東南アジアの美術表現とじっくり向き合い、意見を交わしました。

5

45分

### 鑑賞②のふり返し、全員で共有

別館へ戻り、最後の意見交換の時間です。部屋の中央に用意された大判の白地図に、作品について思ったことや、国・地域について知ったこと、気付いたことなどを思い思いに書き込んでいきます。文字やイラストを書き込むだけでなく、カラーシートを貼り付ける参加者もいました。その後、地図を全員で囲んで、一人一人感想を発表して、大学生ワークショップは終了となりました。④⑤⑥

進行役

国立新美術館

吉澤菜摘

(よしざわ なつみ)

通訳：熊本晃順

まとめ

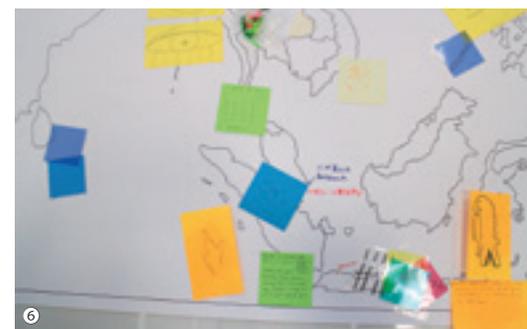
東南アジアの現代美術作品が一堂に会する「サンシャワー」展を、若者たちがお互いの国に対して抱いているイメージなどについて意見を交わすまとない機会と捉えて、留学生と日本出身の学生を対象としたワークショップを実施しました。5時間にわたるプログラムを通じて、参加した日本人学生たちは作品の背景にある東南アジアの多様な社会や宗教思想、歴史について知り、留学生たちは母国の芸術文化や国同士の関係性などを改めて考えるきっかけとなったのではないのでしょうか。ワークショップを完遂するうえで不可欠だった、参加者間のスムーズなコミュニケーションのためにご尽力くださった、通訳の熊本晃順さんと学生スタッフのみなさんに感謝しています。(NY)

参加者の感想

- The hospitality is really good and the discussion with other participants do help me to have an eye open on how a piece of art can be viewed from or address in different form of ideas. (31歳男性/マレーシア出身)
- 東南アジア出身の同世代の方のお話をきながら(自分の国の状況など)作品を見ることができ、1人でただ観るよりも作品への理解が深まったと思います。ふだん作品についてディスカッションをする機会もないのでおもしろかったです。(22歳女性/日本出身)
- The exhibition here shows various point of new from artist in ASEAN. Some of the work tell the story I haven't heard before though it is my neighbor country. I like the discussion part very much. (22歳女性/タイ出身)
- 意見交換もあり、非常に濃い時間でした。(23歳男性/日本出身)

材料

- ・作品リスト ・地図入りメモ用紙 ・白地図
  - ・ASEAN各国の情報入り地図 ・付箋紙
  - ・サンシャワー展図録 ・筆記用具
- 参加者が持参した物：出身地のお菓子



6



2

## 日々の亡霊

### 「六本木アートナイト2017」関連企画

- 開催日時：2017年9月30日(土)13:00~16:00
- 参加者：9名
- 対象：小学4年生以上
- 参加費：無料
- 場所：別館3階多目的ルーム、1階ロビー

#### 概要

古着のシャツを糸状に解きほぐしながら、各自のシャツにまつわる記憶や物語を分かちあうワークショップを行いました。



①



③



④



⑤

1

15分

#### 講師の活動紹介

講師の吉本さんは、古着にあるわずかなシミやシワ、傷などが気になると言います。それは、古着に残る記憶だからです。1枚1枚のシャツにはそれをまとっていた人の時間と記憶が込められています。シャツとして使われていた時を生に、使われなくなった時を死になぞらえて、そこから記憶を紡ぎだし、生と死について思いを馳せる作品のコンセプトを、実際の作品も交えながらお話がうかがえました。

2

15分

#### 「日々の亡霊」作品鑑賞

六本木アートナイトのためにロビーに展示された吉本さんの作品「日々の亡霊」をみんなで鑑賞します。輪郭だけを残した大量のシャツ(シャツの骸骨と呼んでいます)から伸びた糸は、床に置かれた大きな糸円環へ合流。糸円環は、シャツとしての一つの役割を終え、次の役割を与えられるまでの時間を静かに待つ輪廻転生・再生のイメージだというお話をお聞きしました。大きな円環は、何かこの世の大きな理のように見えてきます。

3

45分

#### シャツの身ごろと袖を切る

鑑賞の後、多目的ルームへ戻って、吉本さんから制作の手順の説明を受けます。持参した古着のシャツから、手首や襟、縫い目の部分は残して切り抜きます。(切り抜かれて残ったものがシャツの骸骨です。)切りぬいた布の方は、さらに一定の幅で細かく切り、テープ状にします。シャツが解体されるとともに、シャツにこめられた時間と記憶も解放されていきます。①②

4

70分

#### 布をよじって糸にしなが、思い出を共有する

テープ状にした布に、薄めた洗濯のりをつけながら、こよりにするように指や手で布をよじって糸状にしていきます。それらすべてを1本につないでよじりながら、それぞれがシャツにまつわる思い出を共有。よじられる糸には、自分の記憶と時間だけでなく、他者の思い出も緩やかに混ぜられていきました。③④

5

20分

#### 展示

自分のシャツの骸骨に、出来上がった糸の端をつなぎ、ロビーに展示してある吉本さんの作品とともに飾ります。作った長い糸が、床にある吉本さんの作品の糸円環へと合流される様子は、輪廻の輪の中に生命が昇華されていくような感じがしました。⑤

6

20分

#### 振り返り

最後に、それぞれの感想を共有して、ワークショップは終了しました。

プログラムの流れ



アーティスト  
吉本直子  
(よしもと なおこ)

講師

1972年兵庫県生まれ。文化庁新進芸術家海外留学制度派遣研修員およびポーラ美術振興財団在外研修員として英国に滞在。古着に残された記憶を掘り上げ「生」や「死」に想いを馳せる作品を制作。主な展覧会は「吉本直子Reflection Space-鼓動の庭」(2012、愛知県美術館)、「16th DOMANI明日展 未来を担う芸術家たち」(2013、国立新美術館)、「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」(2015、新潟)など。現在兵庫を拠点に活動中。

まよ

吉本さんの代表作である《日々の亡霊》は、着るものとしての役割を終え、記憶を解体された古着が巨大な集積となり、永遠や生死の循環を象徴する存在として、私たちに静かに語りかけてきます。ワークショップでは、参加者一人ひとりが古着を持ち寄り、アーティストの制作を追体験すると同時に、作品へと昇華。最後には、作品となった古着が《日々の亡霊》の一部となったのを参加者全員で見届け、思い出や記憶と改めて向き合い思いを馳せる、豊かな時間を過ごすことができました。(TM)

参加者の感想

- 今までやったことがないようなことができて楽しかったです。(30代女性)
- 大変だったけどあまりやらなそうなワークショップで楽しかったので、このような珍しい企画をやってほしい。(11歳女子)
- 説明なしで作品を見た時はすごいなあとしか感想が出てこなかったのですが、お話を聞き、さらに自分でも制作することによって作品に対する思いが変わりました。(20代女性)
- 思い入れのある日用品がここまで大きな存在感を持つことに驚いた。(20代女性)
- 吉本さんのお話を直接聞くことができてうれしかったです。シャツを切り、また糸状にする行為に生・死のめぐりを感じました。(20代女性)
- 無心にこよりを作るのが楽しかったです。また、色つきのシャツが展示に混ざると、白一色よりも色彩をおびてきれいでした。(10代女性)

材料

- ・裁ちばさみ ・布用ロータリーカッター
  - ・長定規 ・カッターマット ・洗濯糊
  - ・ウエットティッシュ ・紙コップ
  - ・ペビーワイヤーハンガー
- 参加者が持参した物：綿か麻の古着のシャツとそのシャツにまつわるお話



## SKYSCAPES—空をめぐる想像の時間—

- 開催日時：2018年3月18日(日) 11:00~16:30
- 参加者：23名
- 対象：中学生以上
- 参加費：無料
- 場所：別館3階多目的ルーム

概要

美術作家の野又穂さんを講師に迎え、「空」をテーマとした制作を通じて、さまざまな感性に出会うワークショップを開催しました。



プログラムの流れ

1  
20分

レクチャー

作品の実物を前に、まずは講師の自己紹介と、今日の活動についてのレクチャー。「難しいことは何もありません。空をきっかけに、今日はいろいろなことを思い出す時間、固くなっていた結び目をほどく時間にしてほしいです」と野又さん。「自分の持っている、人と違うところに気づいてみましょう。今までは気づかなかったことに気づきましょう。自分を縛るのは、やめましょう!」。軽快なトークに、緊張気味だった参加者も、声を上げて笑うほどその場になじんでいきました。

2  
25分

資料鑑賞と交流会

次に、参加者それぞれが持ち寄った空にまつわる資料を机に並べ、全員で鑑賞します。本、画集、写真、音楽、映像作品。集まった資料は実にさまざまで、思い出や思い入れが詰まったものばかり。互いが持ち寄った資料について、早速語り合う人の姿もありました。

3  
45分

作品構想

鑑賞会と交流会を経て、いよいよ制作開始! ここからは、一人ひとりが自分自身と向き合う時間です。「間違いなどはありません。ためらわずにどんどん手を動かしましょう」という野又さんの言葉に背中を押されるように、全員がいつせいに動き出しました。①

(昼休憩)

4  
120分

制作

昼食後、席に戻って、制作を再開。自分の中にある空のイメージを具現化しようとする人、ぱっと思い浮かんだイメージを描き留めようとする人、意外性を追求する人、素材をすべて触ることで見えて来るものを模索する人…。それぞれが、身の回りにあるものに積極的にはたらきかけ、自分が目指すものを最良のかたちで表現しようとする熱意が会場に満ちていきます。②③

5  
60分

作品発表会

最後に、計3時間の制作を経て完成した全員の作品をレクチャースペースに集めて、発表会を開催。作品のテーマやこだわり、空の表現を通じて見えてきたことなどを語ってもらいました。空の「百面相」、思い出の中の空、擬人化された空、立体で表現された空。ひとつとして同じものない多様な空の姿に全員が見入り、言葉をお互いに交わしながら鑑賞しあう時間が続きました。④⑤⑥



講師



美術作家  
野又穂

(のまた みほる)

1955年東京生まれ。1979年東京藝術大学美術学部デザイン科卒業。絵画、立体、版画、ドローイングなど様々な表現方法により、現実には存在しない建造物をモチーフとして数多くの作品を発表している。主な展覧会に「カンヴァスに立つ建築 -Architecture on Canvas-」(2004年、東京オペラシティ アートギャラリー)、「もうひとつの場所 -野又穂のランドスケープ / Alternative Sights」(2010年、群馬県立近代美術館)、「空想の建築 -ピラネージから野又穂へ」(2013年、町田市立国際版画美術館)など。主な作品集として『視線の変遷 / Points of View』(2004年、東京書籍)、『もうひとつの場所/ALTERNATIVE SIGHTS』(2010年、青幻舎)、『ELEMENTS - あちら、こちら、かけら』(2012年、青幻舎)などがある。

おもしろ

当たり前が存在しているからこそ見過ごしてしまいがちな空を表現することをきっかけに、一人ひとりがずっと忘れていたことを思い出し、自分にとって当たり前になりすぎていた物事を見つめ直すことを目指した今回のワークショップ。自分と向き合うことを主旨とした場合、思考は内側へと籠りがちですが、周囲と積極的に言葉を交わす参加者の姿が印象的でした。他者の作品を熱心に鑑賞していた様子からも、自分にはなかった世界の見方、感じ方との出会いを楽しんでいることが感じられました。制作や他者との交流を通じて、それぞれが「新しい視点」のきっかけを見出した、とても豊かな時間となりました。(NW)

参加者の感想

- 初めの方は不安に思う気持ちが強かったのですが、先生の「とりあえずやってみよう!」の言葉に後押しされていろいろな画材や方法で作品を楽しみ制作することができました。(10代女性)
- 作品に対するお話もおもしろく興味深かったです。少しの見方や捉え方を変えてみることの勇気をもらいました。(女性)
- 日頃、自分の作品制作のなかで、空はあくまでも背景…というものでしか考えておらず、いつも決まった描き方で変化のないものになっていました。今回のワークショップを通じて新しい考え方のヒントがたくさん得られたと思います。(40代男性)

材料

- 鉛筆 ・色鉛筆 ・カラーペン ・オイルパステル
  - 絵の具 ・色紙 ・和紙 ・包装紙 ・カラーセロハン
  - すずらんテープ ・綿 ・毛糸 ・紐 ・木材
  - ストロー ・紙粘土 ・石 ・ビーズ ・画用紙
  - 接着剤 ・糊 ・テープ類 ・はさみ ・カッター
- 参加者が持参した物: 空にまつわる資料



## みんなでドローイングセッション! ○△□でおしゃべりしよう!

- 開催日時：2018年3月24日(土)  
11:00~12:00、13:30~14:30、15:30~16:30
- 参加者：74名(3回合計)
- 対象：どなたでも
- 参加費：無料 ●場所：1階ロビー

### 概要

「対話」がもたらす物語や、他者との「視点の交換」をテーマに、子どもから大人まで、経験のちがいや障害の有無にかかわらず、誰でも参加できるワークショップを行いました。



プログラムの流れ

### 1

#### はじめに

講師の赤羽美和さんは、「対話」がもたらす物語や予期せぬことをテーマに、人と人、状況をつなぐプロジェクトを展開しています。今回は、赤羽さんがこれまで病院や介護ケア施設などで行ってきた「対話のドローイング」に加え、描いたドローイングから好きな場所を選び、対話した相手と交換する「視点の交換」のふたつの活動を、1階ロビーを会場に行いました。誰でも気軽に参加できるように、対象を限定せず、事前申し込み不要とし、当日先着順で参加者を募集。「対話のドローイング」を二人組で行うAコース2回分(30分×2)とグループで行うBコース1回分(60分)を1つのプログラムとし、ふたつのコースを同時進行させながら、計3回行いました。①

### 2

#### 対話のドローイング(二人組)

集まった人からペアをつくり、向かい合って机に座ります。カラーペンやクレヨン、シールやスタンプなどを使い、30cm四方の1枚の画用紙に交互に○△□の図形を描いていきます。対話を重ねるうちに、紙面にはさまざまな模様や造形が広がっていきます。赤羽さんやスタッフの案内で「10秒で描く」「目を閉じて描く」など、条件付きのドローイングにも挑戦。ゲーム感覚で取り組むことで、初対面のペアも次第に相手との距離を縮めていく様子が見られました。②③

### 3

#### 対話のドローイング(グループ)

8人程度の参加者が集まったら、まずは2と同様に二人組で「対話のドローイング」をします。次に、二人組が集まってグループになり、幅90cm、長さ3mの大きな紙に全員でドローイングをします。広い紙面を前に迷いながら描く人、紙の端から端まで大きな図形を描く人など、描き方や選ぶ画材は人それぞれです。このグループでしか生まれない色の組み合わせや形の面白さを共有しながら、予測のつかない展開を楽しみました。④

### 4

#### 視点の交換

二人組またはグループでの「対話のドローイング」が終わったら、描いたドローイングの中から自分の好きなところを見つけ、丸く切り抜いて缶バッジをつくります。そして、お互いの缶バッジをペアやグループの人と交換することで、自分と他者の視点のちがいを楽しみました。⑤

講師



グラフィックデザイナー、  
テキスタイルデザイナー  
**赤羽美和**  
(あかばね みわ)

1977年生まれ。武蔵野美術大学卒業後、サントリー宣伝制作部、株式会社サン・アドにて多数の広告制作に携わった後、テキスタイルパターンの永続的なストーリー性に魅せられ、スウェーデン国立芸術工芸デザイン大学へ留学、テキスタイル学科修士課程修了。サーフェイスパターンを主なフィールドに、グラフィックデザイナー、テキスタイルデザイナーとして活動するとともに、対話をテーマに人々を招いたプロジェクトを行う。

まとめ

会場では、小さなお子さんと一緒にスタンプを押し合う親子や、描かれた形や線を指で確かめながら線描を残していく盲ろうの方、緊張しつつも次第に歩み寄っていく初対面のペアの姿も見られました。こうした年齢や経験、障害の有無など背景の異なるさまざまな人が場を共有し、他者との関わりや視点のちがいについて思いをめぐらす時間となりました。ワークショップ終了後は、布に印刷したグルーブドローイングを1階ロビーのガラスカーテンウォールに展示し、参加者以外の来場者とワークショップで生まれたストーリーを共有しました。(RT)

参加者の感想

- 相手の動きをゆっくり観察し、何を描こうとしているのか過程を感じるのが面白かった。(女性)
- 初対面の方との取組みでしたが、緊張しつつも歩み寄るようなワークになったのが面白かったです。(女性)
- すごく自然に表現が多様化するのに興味深かったです。(男性)
- 1才児でもできるように、シールやスタンプなど用意してあり、楽しめた。(女性)
- 新しい試みで面白かったです。他者との関わりや視点の違いを改めて気付けるので素敵だと思います。(女性)
- 二人組で交互に絵を描き入れる時、心が動いた。表現することは気持ちがいいということを再確認できた。(男性)
- 「絵を描く」には抵抗がありますが、思いきって参加してみました。○、△、□というのが取りかきやすくて、楽しくできました。(女性)

材料

- 模造紙 ・画用紙 ・カラーペン ・クレヨン
- マスキングテープ ・丸シール
- 丸・三角・四角形のスタンプ ・スタンプ台
- 缶バッジマシン ・缶バッジのパーツ
- サークルカッター



## こいのぼりなう! ワークショップ

「こいのぼりなう! 須藤玲子×アドリアン・ガルデル×齋藤精一によるインスタレーション」関連プログラム

- 開催日時：2018年4月29日(日) 13:00~14:15、14:45~16:00
- 参加者：44組119名(第1回15組42名、第2回29組77名)
- 対象：小・中学生とその保護者
- 参加費：無料
- 場所：第1回 3階研修室A,B、第2回 3階講堂

概要

須藤玲子さんを講師に迎え、「こいのぼりなう!」展のこいのぼりを作る際に出た布の端切れなどを使って卓上こいのぼりを制作するワークショップを開催しました。



プログラムの流れ

1  
15分

### はじめに

「こいのぼりなう! 須藤玲子×アドリアン・ガルデル×齋藤精一によるインスタレーション」では、300匹を超える布製のこいのぼりが展示室を泳いでいます。日本の伝統行事「こどもの日」にあわせて、須藤玲子さんによるこいのぼり制作のワークショップを実施しました。予想以上に応募が多く、研修室で一日2回開催予定でしたが、2回目はより多くの方に参加いただける講堂に会場を変更して開催しました。

### 講師の活動紹介、制作手順の説明

講師の須藤さんが主宰する「NUNO」のテキスタイルが沢山用意されたワークショップ。須藤さんによるNUNOのテキスタイル作りの紹介と、今日のこいのぼり作りの手順が説明されました。①

2  
45分

### こいのぼりの制作

まずは、こいのぼりの各部位にあわせて、机の上に沢山並べられた色とりどりの布地の中から全部で9枚を選びます。手順書を見ながら選んだ布地をハサミで切ったら、のりや両面テープを使って貼り合わせていきます。こいのぼりの形が出来てきたら、棒に接着して、木製の台に棒を差し込んだら完成です。木製の台は、このワークショップのために木工職人たちが腕をふるって制作した特別製。木の種類や形、表面の磨き方も多様で、布のこいのぼりを引き立てます。②③④⑤

3  
10分

### 制作したこいのぼりの鑑賞

制作の後は、出来上がったこいのぼりを机に並べて、参加者みんなで鑑賞しました。鯉の本体や背びれ、目玉など、部位によって異なる布地を用いたこいのぼりに一つとして同じものはありません。作る人によって、家族によって、それぞれちがう魅力を持った個性あふれるこいのぼりが出来上がりました。



テキスタイルデザイナー  
**須藤玲子**  
(すどう れいこ)

講師

Photo by Masayuki Hayashi

茨城県石岡市生まれ。株式会社 布代表。東京造形大学名誉教授。2008年より良品計画、山形県鶴岡織物工業協同組合、株式会社アズ他のテキスタイルデザインアドバイスを手がける。2016年より株式会社良品計画アドバイザー。毎日デザイン賞、ロスコー賞、JID部門賞等受賞。日本の伝統的な染織技術から現代の先端技術を駆使し、新しいテキスタイルづくりをおこなう。作品はニューヨーク近代美術館、メトロポリタン美術館、ボストン美術館、ロサンゼルス州立美術館、ビクトリア&アルバート博物館、東京国立近代美術館他に永久保存されている。

まとめ

須藤玲子さんによるワークショップには100人以上が参加して、ミニサイズのこいのぼりを制作しました。材料として使ったのは、「こいのぼりなう!」展のこいのぼりを作る際に出た布の端切れなど、色も柄も織り方もちがう、100種類以上の布地。その中から、好きな布地を選んで貼り合わせ、ひれや鱗、目玉も全て布でできた鯉を作ります。鯉が出来上がったら丸棒に貼り付けて、木工職人が作った台座にさして固定すると、卓上こいのぼりの完成です。色とりどりの鯉が机の上を泳いで、一足早く「こどもの日」を迎えたようにぎやかな一日となりました。日本の伝統行事である「こいのぼり」の制作を通じて、幅広い世代にテキスタイルの魅力を伝えることが出来ました。(NY)

参加者の感想

- 様々な布の手触りを感じながら工作が出来ました。娘も色々な布や色彩を楽しんでいました。(6歳女子・40代女性・40代男性で参加)
- 普通、触れることのできない「布」に沢山子どもも大人も触れることができ、大大大大満足でした!!! 「こいのぼり」という大切なキーワードで思い出の一日になりました。(7歳女子・5歳男子・30代男性・30代女性で参加)
- 楽しく作らせてもらいました。布について教えてもらいながら、工作ができてよかったです。(9歳男子・40代女性で参加)
- 4才、15才、そして母みんなが楽しめるワークショップでした。「布」に興味を持つことができよかったです。(15歳男子・4歳女子・40代女性で参加)
- 数えきれないくらいの素敵な布から好きなものを選ぶのも楽しく、出来上がりは一人一人個性あふれ魅力的になりました。(8歳女子・30代女性で参加)

材料

- NUNOのテキスタイルの端切れ(正方形・長方形・三角形にカット済み) ・型紙、芯(厚紙) ・のり ・両面テープ ・ハサミ ・針 ・糸 ・木製の台 ・丸棒 ・制作手順書



⑤

## バランスっておもしろい! 風で遊ぶ 真夏の自由研究

- 開催日時：2018年8月11日(土)11:00~16:30
- 参加者：9組18名
- 対象：小学4年生以上の親子
- 参加費：無料
- 場所：別館3階多目的ルームほか

**概要**  
大隅秀雄さんを講師に迎え、わずかな風でゆらゆら動くモビールづくりに挑戦しました。親子でどちらが上手にバランスをとれるか競いながら、できた作品をじっくりと鑑賞する機会となりました。



①



②



③



④

プログラムの流れ

1  
15分

**レクチャー**  
はじめに、大隅さんから制作する上で大事にしていることを聞きました。待つという「ま」、空間という「ま」、合間の「ま」、時間の「ま」、人と人との「ま」など、日本の風土に根付いた暮らし方やものの考え方を手がかりに、風を美しく形にする方法を探し求めて作品が制作されています。

2  
15分

**作品鑑賞**  
国立新美術館の屋外スペースに展示された大隅さんの作品を鑑賞しました。心地よい風を受けて、くると回転しながら風の動きを見せてくれる作品の様子をじっくりと観察しながら、大隅さんに作品の仕組みや風を上手く受けるための工夫を解説してもらいました。これから行うワークショップへの期待が膨らみます。①

(昼休憩)

3  
20分

**ウォーミングアップ**  
石を使ってバランスをとる練習を行いました。石の上に積み上げるのは簡単ですが、重心をずらしたり、小さな石で大きな石を支えるためには練習が必要です。②

4  
130分

**制作**  
今回のワークショップで制作するモビールは、床に置いて鑑賞する形式なので、台座になる石の重さが重要です。自分の気に入った石を見つけたら、完成形をイメージしながら可動部分を制作します。やじろべえのようにゆらゆら揺れる部分に、円形に切ったチタン板と石を重さが釣り合うように取り付けます。また、チタン板を薬品に浸して、電圧の高さを調節しながら電流を流すこと(陽極酸化処理)でチタン板の表面に鮮やかな色を施すことができます。③④

5  
45分

**鑑賞、講評**  
完成したモビールを大隅さんの作品の周りに並べて鑑賞しました。午前中にはわからなかった風を捉える臨場感や作品を自立させるためのバランスをとるための工夫が、ワークショップを体験することで、わかるようになりました。大隅さんから、「季節に合わせて、モビールの石を付け替えたり、部品を足してみたい。実際に制作している彫刻作品も、今回のモビールと同じように部品を組み替えることができる」とお話がありました。⑤



彫刻家  
**大隅秀雄**  
(おおすみ ひでお)

講師

1955年仙台生まれ。1982年東京藝術大学大学院修了(修了制作買上)。中学生の時、学校のすぐ前に箱根彫刻の森美術館が完成する。どうもこの経験が刷り込みとなったようで、デザインの世界を志して学ぶが、ちょっとずれて野外彫刻の道へ。大学院在学中に第2回ヘンリー・ムア大賞展に入選、彫刻の森美術館に作品を展示。以降、「ちょっと待って」という思いを込めて風で動く作品を制作。代表的な展覧会は、2003年 第6回倉敷まちかどの彫刻展、2011年 第24回UBEビエンナーレ(宇部市野外彫刻美術館)、2017年 嬉型鋼 高雄国際銅雕藝術節(台湾:高雄)、2021 ART TAIPEIなど。

まとめ

大隅さんの作品と向き合ったとき、参加者から「やっぱり先生の作品はすごいんだ!」「僕たちのとは全然違う!」という感想がありました。試行錯誤しながらモビールを制作したからこそ、大隅さんの作品を自らの体験をもとに鑑賞できるようになったことがわかる感想ではないでしょうか。夏休みに親子でじっくり体験できる時間をつくりたいとの思いから企画した当ワークショップ。親子で協力して1つの作品を制作するのではなく、当日は良きライバルとしてお互いを意識しながら制作に没頭できるプログラムとなりました。(MS)

参加者の感想

- 石を積んでバランスをとれる場所を探したり、金属や金具など色々な素材や道具を使って楽しかったです。今回のような本格的な材料や技術を体験できる機会を現在活躍されている講師と体験できるのは素晴らしいと思います。(40代女性・女子で参加)
- ふつうワークショップというと、子がメインで親はお手伝いですが、今日は親子それぞれでお互いライバルとして良い刺激になりました。(30代女性・男子で参加)
- 石を触ったり、バランスを考えたり、いつもは使わない五感を使った気がします。夢中で集中できる時間を持つのは良いですね。(40代女性・女子で参加)
- 個人ではなかなかできないことで、家のことを気にせず、子どもと取り組めたことが良かったです。(30代女性・男子で参加)

材料

- ・ペンチ ・ラジオペンチ ・電動ドリル
  - ・石材用ドリル刃 ・石 ・チタンプレート ・アルミ線
  - ・ステンレス線 ・M3ステンレスのネジ・ナット
  - ・ステンレスの二重リング ・端子部品 ・接着剤
  - ・プラスチックグローブ ・エプロンなど
- その他、作品鑑賞体験のため、大隅秀雄さんの作品を屋外に特別展示。



## 手ぶらでブラっと工作室 —オリジナル缶バッジをつくろう!—

- 開催日時：2018年8月19日(日)11:00~16:00
- 参加者：108名
- 対象：どなたでも
- 参加費：バッジ一個につき100円
- 場所：1階ロビー

概要

夏休みの時期にあわせて、大勢の人が行きかう国立新美術館の1階ロビーを会場に、誰でも気軽に立ち寄って缶バッジの制作が楽しめるワークショップを開催しました。



プログラムの流れ

1



### 台紙のデザイン

円形の台紙に好きな絵柄を描いて、缶バッジをつくります。

材料は、よりどりみどり。②

手描きでイラストを描いたり、紙やシールでカラーージュを作ったり。③④

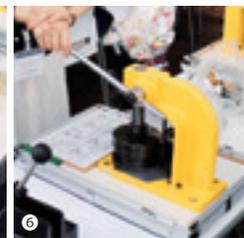
2



### 缶バッジ作り

でき上がった台紙を金具にのせてバッジ作成マシンにかければ、その人だけのオリジナル缶バッジの完成です!⑤⑥

ポップなイラスト、優雅な和柄、クールな幾何学文様。開催中の展覧会にちなんだ絵柄も登場しました。⑦⑧⑨



3



### モニターに映して紹介

どれも、その人のこだわりが詰まった逸品です。完成したバッジは美術館スタッフが写真に収め、会場に設置したモニターで映し出して、ロビーにいる大勢の人に向けて発信しました。⑩

「あっ!あれ、私の!」。自分の作品がモニターに登場するたびに歓声が上がリ、会場は大いに盛り上がりました。

講師

## 国立新美術館 教育普及室スタッフ

まとめ

気軽に参加できて、簡単に作れる缶バッジ。様々な組み合わせや色とりどりのイラストで、大人も子どもも夢中になって楽しく作り上げました。(NW)

参加者の感想

- やり始めたら、思っていた以上に考えてしまいました。色の組み合わせやガラを考えて、楽しいひと時でした。
- 息子(三年生)と参加しました。初めは1コでアイデアうかばないと言っていましたが、1つめをバッジにしたら、次々と意欲がわいてきたようでした。ありがとうございます。大人もたのしかったです。
- 手軽に4才の子供と参加できて、楽しかったです。子供もいろんな材料を使っているうちに次々とアイデアを思いついて楽しそうでした。

材料

- 鉛筆 ・消しゴム ・色鉛筆 ・カラーペン
- マスキングテープ ・シール ・色紙
- 布地をコピーした紙 ・はさみ ・のり
- 缶バッジマシン 缶バッジのパーツ





## 影のメリーゴーランド

- 開催日時：2018年12月1日(土)10:30~12:00、14:00~15:30
- 参加者：23組63名(第1回10組27名、第2回13組36名)
- 対象：未就学児(3~6歳)とその保護者
- 参加費：無料
- 場所：3階講堂、展示室1B

**概要**  
美術家の原倫太郎さんと原游さんによる、3歳から6歳の子どもたちが家族と一緒に制作と鑑賞を体験するワークショップを開催しました。



プログラムの流れ

1  
15分

### はじめに

約3年ぶりとなる未就学児を対象としたワークショップを、原倫太郎さんと原游さんを講師に迎えて、「動く自分の影」をテーマに開催しました。

### 講師の活動紹介、制作手順の説明

ワークショップの会場は国立新美術館の講堂です。参加者は床に敷かれた段ボールの上に座って、講師の原さんの作品や制作活動についてのレクチャーを聞きました。続いて、原さんから制作手順の説明があり、いよいよ制作開始です。

2  
40分

### 自分の「影」の制作

このワークショップでは、参加している子どもたちの等身大の「影」を作ります。まずは大きな厚紙の上に子どもたちがポーズをとって横たわり、その輪郭を大人がなぞっていきます。輪郭に沿って厚紙を切ったら、目鼻や丸形、星形など、自由に切り抜き、切り抜いた所にセロハンを貼ります。大人は切り抜き作業を担当、子どもはセロハンを貼るのを手伝ったり、透明シートにお絵描きをしたりします。セロハンを貼り終えたら、「影」の完成です。①②③

3  
10分

### 展示室へ移動、「影」の設置

子どもたち全員の「影」が出来たら、大きな作業用エレベーターに乗って、空っぽの展示室へ移動します。そこには、くるくる回る木製の枠が用意されていました。その枠に「影」をぶら下げて、「3,2,1…」とカウントダウンが終わると…

4  
15分

### 「影」の鑑賞

展示室の照明が消えて、大きな影が壁に映し出されました。子どもたちの色とりどりの「影」が、展示室の壁をゆらゆらと駆けていきます。子どもたちは自分の影を追って走り回り、大人はその様子を楽しそうに眺めていました。④⑤



美術家

### 原倫太郎+原游

(はらりんたろう+はらゆう)

インスタレーション作家の原倫太郎と画家の原游によるアーティスト・ユニット。個々の活動に加えてユニットとしての活動も多く、子どもから大人まで遊べる体験型の作品を制作している。主な展覧会に2012、2015年「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」(新潟)、2017、2021年「北アルプス国際芸術祭」(長野)、2019年「瀬戸内国際芸術祭」(香川)、2019、2020年「水遊び博覧会」越後妻有里山現代美術館[キナーレ](新潟)などがある。2021年夏には、秘境秋山郷(新潟)に位置する元学校を改装した旅館、かたくりの宿(新潟)の体育館に、巨大双六場「妻有双六」が恒久設置された。また、2008年、絵本『匂いをかかされるかぐや姫〜日本昔ばなしRemix〜』が文化庁メディア芸術祭エンターテインメント部門において奨励賞を受賞した。

講師

まとめ

原倫太郎さんと游さんを講師に迎え、3歳から6歳の子どもたちと家族が制作と鑑賞を体験するワークショップを開催しました。親子で力を合わせて、今の子ども等の等身大の「影」を制作し、展示室の壁を踊り回る「影」を鑑賞しました。参加した子どもたちは自分の影を追いかけて、影を真似てポーズをとったり、家族で記念撮影をしたりしながら、いくつもの影が回る不思議な空間を満喫していました。参加者も、講師やスタッフも、展示室の中の現れた「影のメリーゴーランド」に心躍るワークショップとなったと思います。(NY)

参加者の感想

- 思っていた以上に素敵な影が出来ました。実際に作品を展示している会場で作品を展示できた事もなかなかない機会に楽しかったです。(5歳女兒・3歳女兒・40代女性で参加)
- 日頃と違う状況で、ふだんあまりしない活動で、とてもよかったです。(3歳男児・40代男性・40代女性で参加)
- 子供が積極的に参加でき、型をとることで成長が実感できて良かった。(3歳男児・40代男性・30代女性で参加)
- 子どもと一緒に考えながら、家ではできないダイナミックな作品をつくることができ、また、身近にある素材を使用した作品だったので家庭で応用して遊ぶことができる内容がとてもよかったです。(5歳女兒・30代女性で参加)

材料

- 大判の厚紙 ・鉛筆 ・ペン ・はさみ ・セロハン
- セロテープ ・透明シート ・カッター
- カッターマット ・定規 ・型抜き用の台紙
- 木枠(回転モーターと電球付き)

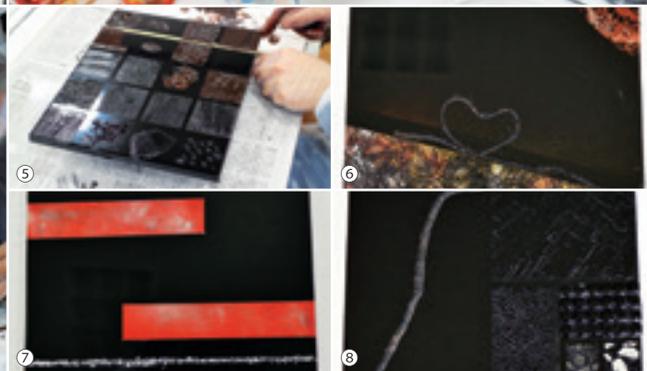


## 漆で作って、漆と暮らす

- 開催日時：2019年1月14日(月・祝) 13:00~16:30
- 参加者：14名
- 対象：中学生以上
- 参加費：1,000円
- 場所：別館3階多目的ルーム

概要

漆芸作家の坂田太郎さんをお迎えし、作品の鑑賞と制作を通じて「日常の美」、「用の美」としての漆の魅力に触れました。



プログラムの流れ

1 15分

### 講師紹介とレクチャー

作家としてのみならず、漆芸の研修会などで幅広く活躍している坂田さん。「漆はお正月やお祝い事などの特別な日に登場する特別なもの、日常とは少し遠いもの、というイメージが強いかもしれませんが。しかし実際は、漆は一万年以上も昔から、私たちの日常生活をさまざまな形で支えて来たのです」。レクチャーでは、漆が採取されてから素材となるまでの過程や漆が用いられた主要な作品を紹介していただくとともに、漆には「塗る」に加え、「接着する」というはたらきがあることについて、お話を聞きました。

2 20分

### 漆の紹介

レクチャーを通じて漆に親しんできたところで、坂田さんによる漆のデモンストレーションに移ります。ひとことで「漆」と言ってもいろいろな種類があり、混ぜるものによって色も粘度も、塗られたあとの効果にも違いがあることなどが紹介されます。特に、混ぜ物として木綿豆腐が登場した時は、参加者からわっと驚きの声が上がりました。今回のワークショップでは、漆の「接着する」はたらきに注目します。①②

3 150分

### 制作

漆のことを知ったら、いよいよ制作開始です。坂田さんが事前に漆を塗って作った板に、「生活の中の美」をコンセプトとして、漆を使って装飾を施していきます。螺鈿や胡粉、卵殻などの伝統的な素材に加え、パールやビーズ、タイルといった身近なものも。表現したいイメージに合わせて、素材を選びます。漆が肌や服につかないよう、全員、完全防備！いろいろな素材を並べながら、「毎日の生活の中にほしい漆作品」の構想を練っていきます。漆を塗ったところにレースを被せ、その上から胡粉を蒔くと、華やかな模様が出来ました。塗った漆にわざと凹凸をつけ、そこに加飾。自在に変化する漆の特質を活かします。加飾は一切せず、漆のさまざまな質感や表情を「魅せる」ことにこだわった人も。③④⑤

4 20分

### 作品発表会

2時間半の制作を終えたのち、全員の作品を集めて発表会を行い、一人ひとりに漆に触れた感想や作品のテーマについて語ってもらいました。螺鈿やパール、胡粉で華やかに装飾したものから、漆の色や質感の違いそのものを前面に出したもので、さまざまな作品が勢揃い。「和菓子のお皿として使います」「パネル作品として部屋を彩ってもらおうと思います」。「これほどまでにいろいろな作品が出てくるとは思いませんでした。皆さんにとって、漆が少しでも身近な存在になってくれたら嬉しいです」と坂田さん。最後に、万が一かぶれの症状が出た時の対処法を軽快な冗談を交えて紹介し、全員で大いに笑ったところで、ワークショップは終了しました。⑥⑦⑧



漆芸作家  
**坂田太郎**  
(さかた たろう)

講師

1969年福岡県生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科工芸専攻漆芸修了。グラフィック作品《ジャポニスム》がデザイン誌『アイデア』に掲載(1991年)。作家としては日本伝統漆芸展入選(1996年)、日本伝統工芸展入選(1998年)をはじめ、日韓工芸展(2001年)、女子美術大学陶芸・メタル・漆芸展(2012年)など活動歴多数。「表千家茶道教室・蒔絵ワークショップ」(2010年)、「HANDS DO PROJECT 東急ハンズ×播与漆行 伝統の技術で器をデザイン、金継ぎ・蒔絵体験」(2013年)など全国各地でワークショップや研修会を開催し、幅広く活躍している。著書に、「はじめての金継ぎ」(世界文化社、2018年)がある。

まよ

今回のワークショップは、普段触れる機会のない漆という素材に触れること、日常とはどこか遠いところにあるイメージが定着している漆を身近に感じてもらうことを目的に開催されました。ごく限られた時間の中での体験だったにもかかわらず、レクチャーや制作を純粋に楽しんでもらえ、日常の中の美としての漆をめぐって参加者同士の会話が弾んだ、豊かな時間となりました。(NW)

参加者の感想

- 短い時間の間に、漆の様々な側面に接することができて、大変勉強になりました。(20代男性)
- 出来上がったものとしてのウルシ塗りしか身近にないので、作業工程を見ること、又、体験することができてとても良かったです。うるしの種類(まぜもの)によって、用途も異なり、色や素材との組み合わせで、バリエーションは無限なのだなと感じました。素敵な時間をありがとうございました。(40代女性)
- 漆に触れられて、すごく楽しかったです!!食器以外の漆、生活に取り入れられそうで嬉しいです。(30代女性)
- 漆を使った工芸は初めての体験でしたが、非常に興味深く、楽しい時間を過ごすことができました。先生の説明はわかりやすく、楽しい雰囲気を作って下さる気遣いも、心地良かったです。またスタッフの方々のサポートも非常に良かったです。(40代男性)

材料

- ・漆 ・螺鈿 ・錫 ・胡粉 ・卵殻 ・ビーズ
- ・和紙 ・麻紐 ・皮 ・レース ・パール ・タイル
- ・ステンシル ・新聞紙 ・ケント紙 ・はさみ
- ・カッター ・ドライシート ・ウェットティッシュ
- ・ウエス ・サラダ油 ・豆腐 ・アルコール
- ・樟脳油 ・紙パレット ・ヘラ ・筆 ・スポンジ
- ・竹串 ・ピンセット ・白衣 ・手袋 ・マスク
- ・ゴーグル ・靴カバー

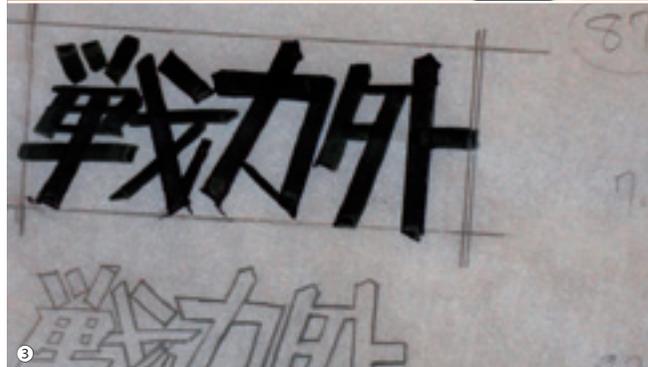


## ぼんやり階級名刺をつくろう!

- 開催日時：2019年2月17日(日)13:00~17:00
- 参加者：18名
- 対象：小学5年生以上
- 参加費：無料
- 場所：別館3階多目的ルーム

### 概要

自分を紹介する言葉を選び、文字をデザインして消しゴムハンコをつくりました。そのハンコでつくった名刺を交換して、価値観や考えを分かち合いました。



プログラムの流れ

1  
30分

### 講師の活動紹介

講師は、木版画を中心に作品を制作されている美術家の風間サチコさん。これまでの作品の写真をしながら、制作の原動力となったエピソードについてお話していただきました。今回追体験する《ぼんやり階級ハンコ》は歴史的階級やネットスラングを消しゴムに彫った作品で、その数は50個を超えています。風間さんは階級について、自分の立場を表す烙印のようなものである一方で、「ハンコを押すことで架空の自分を装える」と説明していただきました。①

2  
40分

### ワークショップのレクチャーと言葉選び

今回のワークショップのために風間さんが作ったハンコは「戦力外」。本来はネガティブで弱い言葉ですが、力強いデザインにすることで堂々とした意志を感じさせます。

レクチャーのあと、参加者も名刺にする言葉を選びました。外見の印象、本来の自分、なりたい自分などについて語り合い、職業や肩書きにとらわれない自由な発想で、「自分」を表す言葉を探します。自分にぴったり、真逆、自虐的な言葉など、キーワードを書きだしていきます。既存の言葉にとらわれず、思い浮かんだ言葉を組み合わせたり、あて字をしたり、新たな造語を考える参加者もいました。②③

3  
100分

### 作品の構想及び制作

ハンコにする消しゴムの大きさは7.5cm×3cm。制限された枠内に文字を配置し、言葉のイメージに合うように字の形やデザインを考えます。デザインが完成したら、トレーシングペーパーで消しゴムに転写し、彫刻刀やデザインカッターを用いて切り出します。文字の外側に切り込みを入れてから、断面を切り落とさないよう刃先の向きに注意して、丁寧に作業します。④

彫りあがった消しゴムハンコを好きな色でスタンプし、「ぼんやり階級名刺」の完成です。⑤

4  
30分

### 作品発表、名刺交換会

最後に全員の「ぼんやり階級名刺」を囲み、1人ずつ自分の作品を発表しました。発表会のあとは、参加者同士で名刺を交換し、会話を楽しみました。⑥



講師



美術家  
**風間サチコ**  
(かざま さちこ)

1972年東京都生まれ。1996年武蔵野美術学園版画研究科修了。墨の濃淡や彫刻刀によるシャープな描線を駆使した木版画を中心に制作している。きわどいテーマも巧みに表現し、漫画風でナンセンス、またユーモアと機知に富んだ作品群は国内外で注目を集める。近年の主な展覧会に「フェミニズムズ / FEMINISMS」(金沢21世紀美術館、2021)、「Tokyo Contemporary Art Award 2019-2021 受賞記念展:風間サチコ Magic Mountain」(東京都現代美術館、2021)、「日産アートアワード2020 ファイナリストによる新作展」(ニッサンパビリオン、2020)、「Co/Inspiration in Catastrophes」(台北当代芸術館、2019)、「風間サチコ展 —コンクリート組曲—」(黒部市美術館、2019)、「ディスリンピア2680」(原爆の図丸木美術館、2018)などがある。著作に、作品集『予感の帝国』(朝日出版社、2018年)がある。

まとめ

《ぼんやり階級ハンコ》の制作の追体験を通して、言葉について考えた今回のワークショップ。日常を振り返って自分自身をじっくりと見つめる機会となりました。言葉選びだけでなく、文字表現を工夫しながら、イメージに近づけるように制作していたのが印象的でした。自分の「階級」を説明しながらの名刺交換はユーモアあふれる自己紹介となり、感情や価値観を皆で共有することができました。(YU)

参加者の感想

- 他の人は私と違うアイデア、字体、言葉など自分だけでは思いつかないような表現などがありとても楽しかった。(11歳女子)
- 同じグループの方々と話しながら何を書くか決めたので最終的に自分でも予想していなかった言葉に決まるととても面白かったです。(20代女性)
- 実際に作品を作ることで、《ぼんやり階級ハンコ》のコンセプトにより理解が進みました。(20代女性)
- 風間先生に実際に声をかけてもらい思い出に残る時間でした。ハンコ作りは初めてでしたが、なかなかできて良かった。(30代男性)
- 想像以上に彫る作業が難しかった。様々な場面で、作家さんやスタッフの方、参加者の方に助けて頂き、仕上げる事ができて良かったです。(40代女性)

材料

- ・消しゴム ・A4用紙 ・鉛筆 ・定規セット
- ・トレーシングペーパー ・カッター
- ・デザインカッター
- ・彫刻刀(丸刀3mm、4mm、4.5mm、三角刀3mm)
- ・サインペン(4色) ・筆ペン(4色)
- ・スタンプ台(4色) ・名刺用紙



4

## 美術館の楽しみ方みつけ！ ココ見てたんけん隊

- 開催日時：2019年3月3日(日) 13:00～16:00
- 参加者：9名
- 対象：小学3年生～6年生
- 参加費：無料
- 場所：3階研修室A,B、館内各所

概要

初めて美術館に来た子から、美術館が好きで何度も来たことがある子まで、参加者全員がワークショップを通じて新しい美術館の見方を発見できるような企画にしました。



1



2



3



5

プログラムの流れ

1  
20分

### アイスブレイク

はじめに、展示を見るだけではない、美術館の楽しみ方を発見するというワークショップの趣旨を説明し、参加者と美術館スタッフを混ぜたグループ内で自己紹介を行いました。アイスブレイクで行う自己紹介の狙いは、活動を共にするグループの仲間の名前を、ゲーム形式で覚えることです。緊張していた参加者の顔が少し緩んだところで、本格的にワークショップを開始しました。

2  
40分

### けんちくツアー

国立新美術館に来たことがある人、ない人で、内容の理解に差が出ないよう、館内全体を全員で巡る、40分のけんちくツアーを行いました。参加者が美術館を体験することを目的としているため、話を聞くだけでなく、実際に触って、音を聞いて、美術館を全身で感じてもらえるようなツアー内容にしました。

3  
30分

### 働いている人へのインタビュー

館内の環境を把握した後、各グループに別れて、美術館で働いている人へのインタビューを行いました。ここでの目的は、他の人が美術館をどう感じているのかを知ることです。美術館で働いているスタッフであるからこそ知っている、夕方に見られる特別な景色などの話を聞き、参加者がワークシートへ熱心に書き込んでいる姿が印象的でした。②③

4  
60分

### ポップ作り

館内全体を使用した活動を終え、けんちくツアーやインタビューで見つけたことや面白かったことを、参加者自身が他の人に伝えるためのポップ作りを行いました。壁や床に貼ってはがすことができる和紙テープを使用し、それぞれのオススメポイントに貼ります。参加者が発見したワークショップの体験を、他の来館者にも体験してもらえるよう、試行錯誤しながら熱中して取り組んでいました。④

5  
30分

### 作品発表

保護者にも集まっていただき、参加者全員で、制作したポップを持って、発見したオススメポイントの紹介を実際の場所で行いました。参加した子ども達は、人前で緊張しながらも、オススメの景色やエレベーターの秘密など、自分が見つけたポイントを自信を持って発表していました。⑤⑥

進行役

### 国立新美術館 教育普及室スタッフ

インタビュー協力者：ミュージアムショップSFTスタッフ、1階中央インフォメーションスタッフ、教育普及室インターン、教育普及室スタッフ

まとめ

今回のワークショップでは、自分と他者の空間の捉え方を把握し、空間を見る視野を広げることで、建物の空間の捉え方を変化させ、日々過ごす場所の今までと異なる見方を考えることを、企画の段階から重要視してきました。1つの見方に捉われず、他者との会話の中から様々な発見をして欲しいという考えがありました。参加者にとっては、インタビューを通じて美術館への興味が増え、他の場所に行った時にも、様々な人と会話を楽しみながら、自分のお気に入りの空間を見つけていくきっかけになったと思います。(10)

参加者の感想

- ふだん美術館に行く機会はなかったが今回のイベントで色々なひみつを知ることが出来て良かったです。次回来た時には家族とゆっくり回りしたいと思います。(11歳女子)
- はたらく人はみんな、すきなものがびじゅつかんにあるから、はたらいていた。(9歳女子)
- 美じゅつかんを食べ物にたとえるしつ問で、いろいろな物にたとえておもしろかったです。(チーズケーキ、ミルフィーユなど) (女子)
- 働いている人によって思っている事がちがった。ショップで働いている方は、とっても毎日楽しいと言っていました。(10歳女子)
- 仕事などはつかれたりすると思うのに、笑顔で楽しそうに話していた。(10歳女子)
- 1つだけのしごとをやっているわけじゃなくていろいろなしごとをやっている。(9歳男子)

材料

- ・鉛筆 ・消しゴム ・カラーペン ・ポスターカラー
- ・ハサミ ・シール(丸型)
- ・和紙テープ(大判のマスキングテープ)



6



②

## 鑑賞ワークショップ みて・よんで・みる・イケムラレイコ展 「イケムラレイコ 土と星 Our Planet」展関連プログラム

- 開催日時：2019年3月16日(土)13:00~15:15
- 参加者：4名
- 対象：どなたでも
- 参加費：無料(ただし、企画展観覧券が必要)
- 場所：企画展示室1E

### 概要

イケムラレイコさんのエッチングと詩を手がかりに、参加者同士で感じたことや考えたことを語り合いながら作品を鑑賞するプログラムを実施しました。



①



④

エピソード イケムラレイコ

雑音が聞こえなくなる頃、街の音が静かになる頃  
夜がふけて宝箱は開けられ  
天はつぎつぎにひかりに輝く星でごった返している  
何千年もかかって光が届いてくる  
静々としていつかはわたり、と  
忘れられていた星の物語が始まる  
生き物たちはパチリと目を開き闇を見透かす  
うねりに沿って山を造り川を開き樹を鳴らし  
見守る、朝が明けるとまで  
我々のプラネット

Epilogue Leika Komatsu

Noise ceases, when life in cities grows silent  
Night falls and treasure chests are opened  
Glimmering stars one by one fill the sky  
Light shines down over thousands of years  
Full of joy, drifting toward sleep  
The forgotten story of the stars begins  
Creatures open eyes wide and peer through the darkness  
Waves run through the earth, make mountains rise, rivers run, trees make  
Until the morning breaks, watch over  
Our planet

③

プログラムの流れ

1 30分

2 10分

3 25分

4 45分

5 20分

### はじめに

「イケムラレイコ」展の会場全体を使い、一般公募の参加者とスタッフが対話をしながら、イケムラレイコさんの作品について考えるワークショップを開催しました。

### 参加者各自で「イケムラレイコ展」を鑑賞

最初の30分は、参加者一人一人で見覧会を鑑賞しました。

### 再集合、参加者・スタッフ紹介、 展覧会概要説明

個人での鑑賞後、会場の入口に集合し、全員でのワークショップを行いました。まずは、「イケムラレイコ」展の企画担当者より展覧会の概要の説明がありました。①

### ウォーミングアップ

次に、参加者全員で対話のウォーミングアップをしました。展覧会冒頭の作品《生命の循環》をまずは鑑賞し、四季や生死に対するイメージ、気付いたことなどを話し合いました。続いて、《舞い下りて》と《頭から生えた木》を対話しながら鑑賞しました。

### グループワーク

全員での鑑賞の後、4,5人のグループにわかれて、グループワークを行いました。「エピソード」の詩をよみ、感想やお気に入りのフレーズを語り合っ、この詩をよみたいと思う場所や展示作品を各自が選びました。②③

### 発表と共有

展覧会会場の中央の部屋に全員が集合し、各自が選んだ詩をよむ場所・作品を発表しました。選んだ場所・作品については、各グループで撮影してきた写真をタブレットに表示して共有しました。最後に展示室入口の《生命の循環》の前に再び戻り、全員の感想を聞き、ワークショップは終了しました。④

進行役

## 国立新美術館 教育普及室スタッフ

まとめ

「イケムラレイコ 土と星 Our Planet」展の会場内には、絵画や彫刻、ドローイングなどの作品に加え、イケムラレイコさん自身による詩がちりばめられています。イケムラさんの創造活動について知るうえで、彼女の詩のことも重要な要素です。このワークショップでは、イケムラさんのエッチングと詩を手がかりに、参加者同士で感じたことや考えたことを語り合いながら作品を鑑賞しました。イケムラレイコさんの創造性に満たされた展示室の中で共に過ごした時間は、参加者にとっても、スタッフにとっても心豊かなひと時となりました。(NY)

参加者の感想

- イケムラレイコさんの作品を理解するうえで重要な詩・ことばを通して、スタッフの方々や参加者のみなさんとお話できたのが、とても楽しかったです。(20代女性)
- イケムラさんの初期の作品という「生命の循環」から導入され、イケムラさんの全体の思想を知れた気がします。いろいろな方々のイメージとあわせながら豊かなときを過ごすことができました。(50代女性)
- 議論しながらゆっくり作品を見ることで、イケムラさんの作品の良さを違う視点から発見することができた。こういう体験は今まで自分はできていなかった。とても刺激的だった。(20代男性)
- 作品を前にじっくり大勢で話す時間はたのしく貴重でした。詩にヒモづけて部屋や作品を見る時間は、もう少しチームと一緒に回り、いろんな意見を聞いたり質問されて考えるということをしたかった。(50代女性)

材料

- ・クリップボード ・鉛筆 ・《生命の循環》の紙
- ・「エピソード」の詩の紙 ・作品リスト
- ・展示室マップ ・トートバッグ ・タブレット



2

## マイ・こいのぼりなう!2019

- 開催日時：2019年4月21日(日)10:00~18:00
- 参加者：222名
- 対象：どなたでも
- 参加費：無料
- 場所：1階ロビー

概要

美術館の1階ロビーに特設コーナーを設けて、だれでも参加できる、紙製のこいのぼりを制作するワークショップを開催しました。



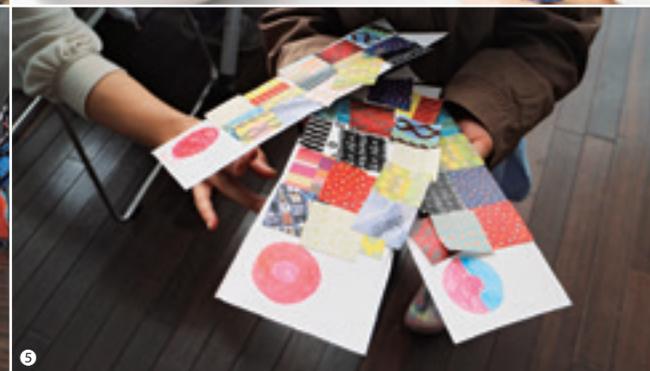
1



4



3



5

プログラムの流れ

1

### 「いろいろなまようの紙」を選ぶ

「こどもの日」を前に、紙製のこいのぼりを制作するワークショップを開催しました。制作に使用するの、2018年に開催された「こいのぼりなう! 須藤玲子×アドリアン・ガルデル×齋藤精一によるインスタレーション」の会場内体験コーナーのために特別に作られた紙製のキットです。20種類の模様の紙を自由に組み合わせて台紙に貼るだけの簡単な作業で、カラフルなこいのぼりを作ることができます。①

2

### 台紙に「いろいろなまようの紙」を自由に貼る

受付を終えたら、作業用の机に置かれたトレイから「いろいろなまようの紙」を自由に選びます。こいのぼり1匹を作るのには、通常は20~30枚が必要です。こいのぼりの台紙に「いろいろなまようの紙」を並べて、うろこのデザインを考えます。配置が決まったら、台紙の両面テープのはくり紙を剥がして、「いろいろなまようの紙」を貼り付けていきます。②③

3

### 目玉を描く

「いろいろなまようの紙」を貼り終えたら、こいのぼりの目玉をペンで描き込みます。④

4

### 台紙をカットする

最後に、枠線に沿って台紙をカットして、マイ・こいのぼりの完成です。(台紙を先にカットしてから「いろいろなまようの紙」を貼ることもできます。)家に持ち帰り、壁に貼る、棒に取り付けるなどして、こいのぼりを飾ってください。⑤⑥

講師

## 国立新美術館 教育普及室スタッフ

まとめ

こどもの日を前に開かれたこのワークショップには、家族連れや友人同士、海外からの来訪者など200人以上が参加し、工夫を凝らして紙を立体的に貼ったり、紙の組み合わせを変えて何匹も作ったり、完成したこいのぼりを家族で見せ合ったりして、それぞれのスタイルでこいのぼり作りを楽しんでいました。2018年に開催された「こいのぼりなう!」展をきっかけに生まれた「マイ・こいのぼりなう!」が、毎年恒例のワークショップとになっていく、その初回となりました。(NY)

材料

・「マイ・こいのぼりなう!」制作キット(台紙、いろいろなまようの紙) ・ハサミ ・ペン



6



## 手ぶらでブラっと工作室2019 —オリジナル缶バッジをつくろう!—

- 開催日時：2019年7月21日(日)11:00~16:00
- 参加者：122名
- 対象：どなたでも
- 参加費：缶バッジ一個につき100円
- 場所：1階ロビー

### 概要

多くの人が行き交う1階ロビーを会場に、気軽に立ち寄って缶バッジをつくるワークショップを開催しました。事前の準備も予約も一切いらない気軽さ、手軽さで、大人も子どもも、楽しくバッジを作り上げました。



プログラムの流れ

### 1

#### 受付、缶バッジの图案制作

日曜日の朝、1階ロビーの一角に机が並べられ、2台の缶バッジマシンが設置されました。一年ぶりの「手ぶらでブラっと工作室」が始まります。

誰でも予約無しで参加できるワークショップなので、参加者は事前開催を知って来た人もいれば、ちょうど1階ロビーを通りかかった人、展覧会を観た後で立ち寄った人など様々です。

受付を済ませたら、机に用意された75ミリ缶バッジ用の円形の台紙に、手描きしたりカラーージュしたりして图案を作っていきます。描画やカラーージュのために用意された材料は、カラーペン、色鉛筆、パステル、カラフルなマスキングテープ、シール、画用紙、千代紙、色々な模様の布地をコピーした紙、英字新聞など。参加者はそれらの材料を使って、台紙の上に思い思いに图案を作り上げていました。①②③

### 2

#### 缶バッジマシンでプレス

图案が出来上がったら、金具の上に台紙と透明のカバーを置いて、缶バッジマシンでプレスすると、缶バッジの完成です。④

### 3

#### 撮影してモニターに投影

出来上がった缶バッジはデジタルカメラで撮影して、その写真をロビーに置かれたモニターに投影しました。モニターの前では、参加者が自分が作った缶バッジを持って、家族や友人と楽し気に記念撮影をしていました。

講師

### 国立新美術館 教育普及室スタッフ

まとめ

2018年夏の「手ぶらでブラっと工作室」に引き続き、2019年も1階ロビーを会場に、気軽に立ち寄って缶バッジを制作するワークショップを開催しました。夏休み中の休日とあって、家族連れや友人同士、海外からの来館者で賑わい、100人以上が参加して缶バッジ作りを楽しみました。今回の手ぶらワークショップでは、色とりどりの千代紙や折り紙、様々な模様のテキスタイルをコピーした紙をふんだんに用意していたためか、缶バッジの图案を手描きする人よりも、カラーージュして作り上げる人が多かったのが印象的でした。完成した缶バッジが映し出されたモニターの前で足を止め、熱心に見入る人の姿も見られました。(NY)

参加者の感想

- 子どもの頃に戻ってつい熱中してしまいました。美術が苦手な息子(中2)も楽しんでいました。
- 童心に帰ったような気がして、とても楽しかったです。スタッフさんもみなさんとても優しく丁寧で、国立新美術館が好きになりました。
- こんなに集中して何かを作ったのはひさしぶりだったので楽しかったです。

材料

- 鉛筆 ・消しゴム ・色鉛筆 ・カラーペン
- コピック ・パステル ・マスキングテープ
- シール ・色紙 ・和紙 ・包装紙 ・はさみ
- のり ・缶バッジマシン ・缶バッジのパーツ





## 六本木の美術館をたっぷり聞いてみよう — 想像する音、創造する耳

- 開催日時：2019年8月12日(月・祝) 10:30~12:30
- 参加者：21名
- 対象：小学3年生以上
- 参加費：無料
- 場所：別館3階多目的ルーム、美術館敷地内各所(屋外含む)

**概要**  
「音」をテーマに、普段とは違う音の体験をします。簡単な音の出る装置と、音を聴く装置を作って、国立新美術館内外の音に丁寧に耳を傾け、聴くことを意識することで、聴く体験をアップデートするワークショップです。



プログラムの流れ

1  
20分

### 講師紹介と、サウンド・エデュケーションを通しての自己紹介

アーティストの三原聡一郎さんをご紹介します。さっそく音を聞く練習です。目を閉じ、黙って耳を澄ませ、1分間、聞こえる音を紙にメモをします。そして参加者の自己紹介をかねて見つけた音の共有をします。

2  
10分

### 音の出る道具(音具)と集音機の作成をして、音を聞く練習

白樺の枝を小さくカットしてネジ穴を空けた木材にネジを差し込み、パードコールと呼ばれる音具を作り、首から下げられるよう毛糸をつけます。そして扇形にカットされた厚めの紙をラップ状に巻いて集音機をつくります。自分の作った音具を鳴らしたり、集音機を耳にあてて聞いてみて、どこからどんな音が聞こえるか、音の指向性を意識する練習をしました。白樺は、美術館に植えられている木を剪定した際に出た枝を使っています。②

3  
10分

### 三原さんのミニレクチャー

三原さんの作品《想像上の修辞法》の実物を見せてもらいつつ、その作品が出す音も聞いてみます。まるで鳥のさえずりのような音がするのですが、それは木と金属がこすれて鳴る音で、生物学的には意味のない音です。その音が人が(あるいは鳥も)鳥の鳴き声と勘違いしてしまっていることで、音に興味を見出す行為と思考が、芸術という概念を作り出すことに似ていると思った、と創作の意図を話されました。⑤

4  
55分

### 音具をもって美術館の屋内外に音を聞きに行く

音具と集音機を持って、美術館の敷地内を「耳でお散歩」します。真夏なので、たくさんのセミの声に他の音がかき消されそうでしたが、よく聞くとセミにも個性があることがわかります。美術館の裏へ回ると鳥の声や車の音など他の様々な音が聞こえてきました。館内では、何も準備中の展示室にも入り、外と違って閉じられた空間では音が回ることを体験し、音の聞こえ方の違いや、普段気にしていない空調の音なども意識するようになっていきます。①③④

5  
15分

### 別館3階多目的ルームに戻り、ワークショップの感想の共有

最初の部屋に戻り、改めて三原さんから音とは何か?というレクチャーを受け、様々な音源を聞かせてもらいつつ、さらに音について深く学び、感想を共有して終わりました。

講師



アーティスト  
**三原聡一郎**  
(みはら そういちろう)

世界に対して開かれたシステムを提示し、音、泡、放射線、虹、微生物、苔、気流、土そして電子など、物質や現象の「芸術」への読みかえを試みている。2011年より、テクノロジーと社会の関係性を考察するために空白をテーマにしたプロジェクトを国内外で展開中。2013年より滞在制作として北極圏から熱帯雨林、軍事境界からパイオアートラゴまで、芸術の中心から極限環境にいたるまで、計8カ国12箇所を渡ってきた。アリス・エレクトロニカ、トランスメディアアール、文化庁メディア芸術祭、他で受賞。プリアリスエレクトロニカ2019審査員。また、方法論の確立していない音響彫刻やメディアアート作品の保存修復にも近年携わっている。

まとめ

このワークショップを通じて、普段聞き流している音が多くあるということに気づき、耳が敏感になったようです。また、自由に聞いているつもりでも、見えるものや、言葉などにも影響され、耳は無意識に音を取捨選択していたりすることがわかりました。普段聞き逃している音を探して注意深く聞く行為は、まるで芸術の本質を探るような体験でした。(TM)

参加者の感想

- 身近に聞こえている音に改めて集中してみると大変おもしろい体験をさせていただきました。ありがとうございました。(40代女性)
- ラップを耳にあてたときの耳に入ってくる音がふだんとちがってすごかった。(10歳男子)
- 普段気にしない音に耳をかたむける時間はとても面白かった。息子2人も興味を持って体験している姿はとても新鮮だったので、また一緒にやってみようと思います。(40代女性)
- 改めて音について意識することができました。サウンドアートの興味が持てたので、今後注目していこうと思います。(40代男性)
- 木から鳥の声が聞こえるものを作るのがよかった。(10歳女子)
- 日常では意識しない音を感じることができて、自分の知覚についてあらためて認識するきっかけとなった。(40代男性)

材料

- 紙 ・鉛筆 ・消しゴム ・白樺の枝 ・毛糸
- ネジ ・厚紙 ・両面テープ



## カーテンの向こうに何がいる？— ゆうれいの世界をつくってみよう

「クリスチャン・ボルタンスキー - Lifetime」関連イベント

- 開催日時：2019年8月18日(日) 10:30~12:30
- 参加者：26名
- 対象：小・中学生とその保護者
- 参加費：無料
- 場所：3階講堂、企画展示室2E

概要

「クリスチャン・ボルタンスキー - Lifetime」の関連イベントとして、幽霊の世界を影絵で表現するワークショップを開催しました。



プログラムの流れ

- 1 15分
- 2 20分
- 3 40分
- 4 10分
- 5 15分
- 6 15分

### はじめに

ボルタンスキーが展覧会「クリスチャン・ボルタンスキー - Lifetime」の東京会場のために制作した《幽霊の廊下》を鑑賞し、幽霊の世界を想像して影絵を制作するワークショップを実施しました。

### ウォーミングアップ

講堂に集合した参加者は、ワークショップの流れなどの説明を聞いた後、「幽霊」と聞いて思い浮かぶ印象や見た目の特徴をワークシートにかき出しました。「足がない」、「髪が長い」、「ぼんやりしている」、「白い服を着ている」、「悲しそう」などのイメージや言葉が聞かれました。①

### ボルタンスキー展を鑑賞

企画展示室2Eへ移動して、「クリスチャン・ボルタンスキー - Lifetime」展に展示されている《幽霊の廊下》、《影》、《影(天使)》などを鑑賞しました。②

### 「幽霊」の制作

講堂へ戻り、自分がイメージする幽霊や死者の世界にある物を、黒い画用紙に白い色鉛筆で描き、切り抜いて「幽霊」を制作しました。影絵にするための、画用紙の裏に竹ひごを貼り付けて強度を保ち、吊り下げのためのひもを取り付けます。③

### 影絵のセッティング

講堂の設備の照明用バトン(天井から照明や看板を吊り下げするための棒)に吊られた大きなシートの上に、制作した「幽霊」を設置します。④

### 影絵の鑑賞

シートと「幽霊」を吊り下げたバトンを天井まで引き上げ、スポットライト以外の照明を消灯すると、シート越しに幽霊たちの姿が浮かび上がりました。ボルタンスキーの作品《幽霊の廊下》と同様、幽霊たちがゆらゆらと揺れるように、シートの背後から扇風機で風を送る工夫もしました。照明を落とした後は自由鑑賞の時間として、参加者は角度を変えて眺めたり、記念撮影をしたりしていました。⑤

### 感想を発表

最後に、参加者が今日の感想を発表して、ワークショップを終了しました。ボルタンスキーの「幽霊」の表現を、鑑賞と制作を通じて追体験し、日本とヨーロッパの「幽霊」のイメージの違いについて考えるワークショップとなりました。

進行役

## 国立新美術館 教育普及室スタッフ

まとめ

ボルタンスキーの作品《幽霊の廊下》から着想を得て、幽霊の世界を影絵で表現するワークショップを開催しました。参加者はまず、「幽霊」と聞いて思い浮かべるイメージをワークシートに書き出し、それから展示室へ移動して、《幽霊の廊下》を鑑賞しました。参加者たちが抱く幽霊には、「足がない」や「ぼんやりした姿」、「白い」などのイメージが多かったのに対して、ボルタンスキーの《幽霊の廊下》には骸骨や首から上だけの幽霊が登場します。イメージの違いにも注目しながら鑑賞した後、講堂に戻った参加者は、「カーテンの向こう側が幽霊たちの世界だとしたら、どんな幽霊がいるか」を想像しながら、黒い画用紙で幽霊を制作しました。そして、最後にカーテンに見立てた布と一緒に天井から吊り下げ、スポットライトで照らし出して、講堂にその日限りの幽霊の世界を出現させました。(NY)

参加者の感想

- みんな個性ゆたかなゆうれいをつくっていいな—と思いました。(10歳男子)
- 1枚の紙からたくさんのアイデアがでてきてすごかった(11歳女子)
- 自分でつくったおぼけがかけえになっていることがうれしかった。(9歳女子)
- ゆうれいは本当にいるのかということが気になった。(10歳男子)
- 作品にふれたことで、ワークショップのイメージがわかり易く、作品づくりにつながりました。作品に集中することで日常から解放されて、気持ちがスッキリしました。(50代女性)
- 娘(9才)が展示を見た後、(チラリと見てしまった)古着の山に何か感じとったらしく、ユダヤ人(アンネ・フランク)のがい骨のゆうれいを作りました。芸術作品が言葉抜きに伝える力のすさまじさに感服しました。(40代女性)

材料

- ・ワークシート ・鉛筆 ・黒い画用紙(四つ切)
- ・白色鉛筆 ・定規 ・ハサミ ・カッター
- ・カッターマット ・竹ひご ・ペンチ
- ・黒ガムテープ ・セロテープ ・シート
- ・扇風機 ・クリップ ・結束バンド ・ひも



1

## 視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ

「話しているのは誰？ 現代美術に潜む文学」展関連プログラム

- 開催日時：2019年10月6日(日) 11:00~13:00、15:00~17:00
- 参加者：24名(第1回11名、第2回13名)
- 対象：どなたでも
- 参加費：無料(ただし、企画展観覧券が必要)
- 場所：企画展示室1E
- 協力：視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ

概要

日本の現代美術家6名によるグループ展「話しているのは誰？ 現代美術に潜む文学」の関連プログラムとして、「視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ」を開催しました。



2



3



4



5

プログラムの流れ

1

15分

### 展示会の概要説明、スタッフ紹介

この日の集合場所は、1階ロビーの企画展示室1E前。参加者は2組にわかれ、「視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ」のナビゲーター(視覚障害者1名・晴眼者1名)が待つテーブルに着席して、ワークショップのスタートです。  
まず、美術館のスタッフから展示会の概要について説明があり、その後、グループごとに参加者とスタッフが自己紹介をしました。

2

75分

### 展示会の鑑賞

続いて、ワークショップのメインである鑑賞の時間です。展示室へ入り、1つ目のグループは北島敬三さんの写真作品と田村友一郎さんのインスタレーションを鑑賞、もう一方のグループは田村友一郎さんのインスタレーションと豊嶋康子さんの展示室を鑑賞しました。参加者は作品や空間について、形・色・大きさなど「見えていること」と、印象・感想・解釈などの「見えていないこと」を言葉にして伝え合い、お互いの視点や考え方を共有しました。①②③④

3

30分

### ふり返り

展示会鑑賞後は、再び1階ロビーに集まり、グループごとに印象に残った作品や、対話しながら鑑賞して思ったことを語り合いました。自分が見ているもの・感じていることを言葉で伝えることの難しさを改めて知ったという意見や、同じ空間で同じ作品を鑑賞していても人によって見ているところが違うのが面白いといった感想が聞かれました。⑤



## 視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ

林建太(はやし けんた)  
鄭晶晶(てい じんじん)  
白鳥建二(しらとり けんじ)  
山崎康興(やまさき やすのり)

講師

2012年始動。スタッフは視覚障害者と晴眼者で構成されている。月一回のペースで全国の美術館や学校で目の見える人、見えない人が言葉を介して「みること」を考える鑑賞プログラムを企画運営している。最近の主な活動は2017年から継続している東京都写真美術館での鑑賞プログラムや、演劇の俳優大石将弘(ままと、ナイロン100°C)らと制作した「きくたびプロジェクト 横浜美術館編」など。2020年以降は主にオンラインの鑑賞プログラムを通して、芸術へのアクセシビリティや「みること」について誰もが気軽に安全に語り合える場づくりを目指している。

まとめ

2017年に「サンシャワー：東南アジアの現代美術展 1980年代から現在まで」展で実施した「視覚障害者をつくるワークショップ」を、今回は日本の現代美術家を紹介する展示会で行いました。解説や正解が提示されない展示室の中で、参加者たちが語り合いながら作品と向き合ううちに少しずつ発見や共感が生まれてくる様子は、どこか謎解きゲームのようでもありました。物の見え方や考え方、経験してきたことが違う同士が、一つの作品の前でじっくりと対話する時間は、参加者に新たな視点をもたらし、美術鑑賞を通じたコミュニケーションの可能性を示す機会となりました。(NY)

参加者の感想

- 初めてで新鮮な体験。視覚障害者のためにお手伝いをするのではなく、共に新しい体験ができた。(70代男性)
- 普段、目が見える友人と行くと、言葉にせずとも「アレ」などお互い同じものを見ているような気がしてしまうのですが、より具体的にことばにおこすことで、鑑賞そのものが変わったことを体感しました。(20代女性)
- 見たモノを伝えることが想像していたよりも難しくもあり、それが他の方の方見方を共有することにもつながり、鑑賞が深まりました。とても楽しかったです。(10代女性)
- 自分一人では見過ごしてしまう美術作品のメッセージに気づくことができ、非常に楽しかったです。(20代男性)



10

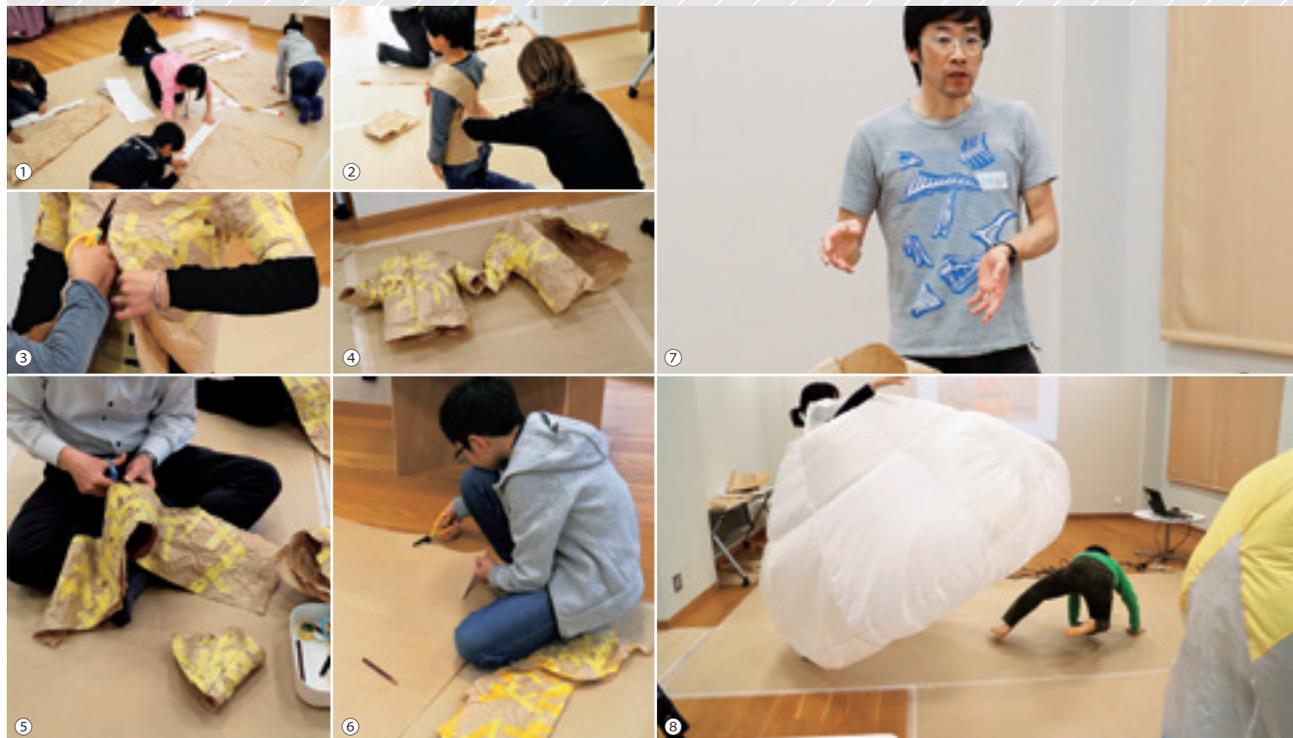
## どこまで“からだ”？ 紙を使って大変身！

## どんな“からだ”？

- 開催日時：2020年1月26日(日) 13:00～16:30
- 参加者：14名
- 対象：小学生以上のご家族
- 参加費：無料
- 場所：別館3階多目的ルーム

### 概要

美術作家の東明さんと一緒に、“からだ”をテーマに自分自身と向き合い、「自分」について考えるワークショップを開催しました。



### プログラムの流れ

1

15分

#### はじめに

「自分」って一体なに？ 普段の忙しい生活の中では、自分のことについてじっくり考えることはなかなかありません。今回のワークショップでは、そんな「自分」と、徹底的に向き合っていきます。

#### 講師の活動紹介

講師の東さんは、「わたし」の範囲はどこまでか？」をテーマとした作品を制作されています。最初のレクチャーでは、東さんのこれまでの活動や作品についてのお話を聞きました。

2

120分

#### トルソづくり

「自分」を考える今日のワークショップのテーマは、「からだ」。まず、肌の色に近いクラフト紙を使って、自分の等身大のトルソを作ります。

##### ①クラフト紙とあそぶ

参加者は配られた大きなクラフト紙を、手に馴染むよう、東さんの合図で、みんなでいっせいにくしゃくしゃにします。

##### ②紙を切る

クラフト紙がくしゃくしゃになって柔らかくなったら、東さんが用意した「ものさし」を紙に当て、大きな短冊状に切り分けていきます。①

##### ③自分を「型取り」する

短冊状に切った紙を体にぐるぐる巻きつけて、自分を「型取り」します。肩からおへその下あたりまで、隙間ができないよう、しっかりと巻いて体を覆います。②

##### ④型紙をつくる

はさみを入れ、脱皮をするように紙を脱いで、6つのパーツに切り分けます。③④⑤

切り分けた型紙を新しいクラフト紙にのせ、鉛筆で輪郭を取り、はさみで切り分けます。⑥

##### ⑤貼り合わせてトルソをつくる

切り分けた6つのパーツをボンドで貼り合わせ、トルソとして仕上げます。これがかかなり大変な作業に！「平面を立体として組み上げる難しい作業です。しかも人間の体って、左右対称ではないんですね」と東さん。自分の体の「写し」のはずなのに自由にならないもどかさ、自分の体の複雑さに、はっとした瞬間でした。⑦

3

45分

#### パラフーク体験

トルソ＝自分の「分身」を作ったあとは、東さんの代表作のひとつ・パラフークを体験。

色とりどりのパラフークを着て、全員が体の大きな別の生き物になったかのような姿に！自分の体が大きくなると同時に、広がったパラフークの中に他の人が飛び込むと、自分と他者の境目があいまいになる不思議な感覚も楽しめました。⑧⑨

4

15分

#### トルソとご対面

最後に、参加者一人ひとりが完成した自分のトルソと対面し、文字通り「自分」と向き合う時間を過ごして、ワークショップは終了しました。⑩



美術作家  
**東明**  
(ひがし あきら)

### 講師

1974年広島県生まれ。1998年京都市立芸術大学彫刻専攻卒業。布やビニールなどの身近な素材を利用し、観客と作品とのインタラクティブな関係の形成を目指す。近年の展覧会に「水あそび博覧会」(越後妻有里山現代美術館キナーレ、2019)、「てんとうむしプロジェクト05 NEW HOME」(京都芸術センター、2014)、「なつのかくれが」(広島市現代美術館、2013)ほか。レジデンスプログラム「ナイロビ・レジデンス」(ナイロビ、2011)、「フォース・オブ・ネーチャー」(ノースキャロライナ、2006)、「境谷小レジデンス」(京都市立境谷小学校)参加。子どもや親子向けワークショップも各地で多数開催。

### まとめ

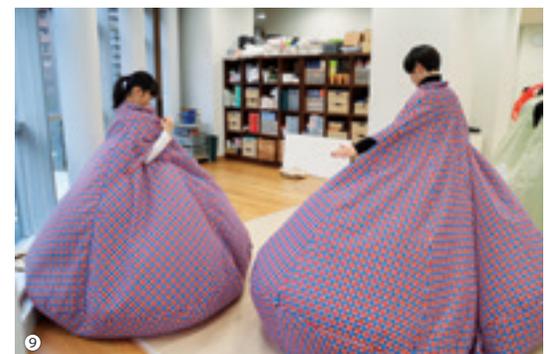
もっとも身近でありながら、じっくりと考える機会がめったにない「自分」。自分の範囲の感じかた。自分ではない、他者の意識のしかた。“からだ”をテーマに自分と向き合うことで、今までは意識しなかったこと、当たり前だと思っていたことを見つめ直す時間となりました。(NW)

### 参加者の感想

- 楽しかったです。円錐形の服は身体のかたちがかわったような、別の生き物になったような気持ちになりました。(40代女性)
- 工作では型をとれてうれしかった。体験は、自分が大きく思えて楽しかった。(11歳男子)
- 自分の体とクラフト紙で芸術作品が生まれることに感動しました。ありがとうございました。(50代女性)

### 材料

- ・パラフーク(東さんの作品) ・クラフト紙 ・はさみ
- ・鉛筆 ・色鉛筆 ・マジック ・保護用段ボール
- ・ボンド ・ミニビニール袋 ・筆 ・緩衝材
- ・巻き段ボール ・養生テープ ・マスキングテープ



9



## 自分の分身!? 3本足の不思議な生き物 マネックスターをつくろう!

- 開催日時：2020年2月23日(日) 11:00~17:00
- 参加者：17名
- 対象：中学生以上、スマートフォンもしくはタブレット端末で撮影した画像を自身のtwitterアカウントで投稿できる方
- 参加費：500円 ●場所：別館3階多目的ルームほか

**概要**  
浅野暢晴さんの代表作《トリックスター》を真似して作る、自分の分身としてのマネックスター。Twitterにマネックスターの画像とコメントを投稿し、SNS上で行うコミュニケーションを楽しみました。



プログラムの流れ

1 55分

### トリックスターを使ったウォーミングアップ

浅野さんの代表作《トリックスター》とは、日本の神話や欧米の先住民族に伝わるトリックスター(道化師)たちの姿を陶土で表現した彫刻作品で、人間(二本足)ではなく、動物(四本足)でもない存在のため、その間に位置する三本足の姿で表現されています。まずは20体の《トリックスター》を触りながら、どのような模様や形があるのかじっくり観察しました。①

(昼休憩)

2 120分

### 制作

つぎに、浅野さんのトリックスターを参考に、オープンで加熱すると固まる粘土で、3本足の「マネックスター」を作りました。オープン粘土の扱い方に慣れるため、粘土を丸いボール状にして、粘土べらで「ポロノイ模様」をつける練習をします。ポロノイ模様とは、キリンの斑やトンボの羽などに表れる幾何学模様のことで、浅野さんが作品を制作する際によく使う模様です。道具の使い方やデザインで迷っていることは、浅野さんに相談しました。②③

3 30分

### レクチャー&オープンで焼く

完成したマネックスターをオープンで加熱して、硬化させます。マネックスターが焼き上がるまで、浅野さんがこれまでに制作してきた作品の話をお聞きしました。また、浅野さんが鑑賞者とSNS上でどのようなコミュニケーションを行っているのか確認しました。

4 60分

### 撮影&Twitterに投稿する

今回のワークショップで制作したマネックスターは、単なるオブジェではなく、撮影し、「#マネックスター」のタグを付けてTwitterに投稿することで、SNS上のコミュニケーションツールとして使うことができます。最後に、焼き上がったマネックスターと共に国立新美術館の周辺に出かけて撮影した写真を、Twitterで投稿しました。④  
でき上がった様々な個性を放つマネックスターを用いてSNS上で行うコミュニケーションを通して、参加者はオンラインゲームで自分をキャラクターに置き換えるのとは異なる楽しさを体験したのではないのでしょうか。⑤



彫刻家  
**浅野暢晴**  
(あさの のぶはる)

講師

1979年生まれ。2004年筑波大学大学院彫塑分野修了。土偶を見た時に受けた独自の感覚をきっかけに、土を焼くことに興味を持ち、闇に住む人ならざる存在達に焦点を当て、陶を素材に彫刻作品を制作。SNSで話題になったことをきっかけとして、彫刻作品に「トリックスター」という名が、鑑賞者によって与えられた。また、彫刻をホームステイさせる「旅するトリックスタープロジェクト」「青空教室プロジェクト」などを行い、SNSを通じた新しい発表の形を模索している。中之条ビエンナーレ(2017、2019、2021)などに参加。神社(常陸國總社宮)で行われる展覧会「の祭り」の企画・運営もしている。

まとめ

インターネットを通して世界中の人と簡単に交流できる昨今、ゲームの中で自分をキャラクターに置き換え、現実世界と同じように仮想空間で振る舞うことも可能になりつつあります。SNS上のコミュニケーションは、実際に人に会って会話するよりも、自分の考えを率直に相手に伝えられる場合もあります。参加者自身の分身として生み出されたマネックスター達は、今後どのような関係や繋がりを築いていくのでしょうか。(MS)

参加者の感想

- ワークショップに参加したのは初めてでしたが、とても楽しく作品を作ることができました。作って終わりではなく、SNSを活用して作品を公開する試みが新鮮で面白かったです。(女性)
- 自分の分身を作るという意識はなかったのに夢中でつくっていて、他の人の作品と比べて見ると、なんとなく自分らしきかと思えました。奥が深いワークショップだったと思います。(女性)
- なかなか思うようにいかない面もありましたが、楽しい時間を過ごさせて頂きました。形を整えたり、文様を考えたり、さっくりとできそうで出来ない所に手が止まることもありましたが、本業の方であれば楽しかったりするのだろうか…。作家さんの生みの苦しみ、作る楽しさに少し触れられたように思います。(女性)

材料

- オープン粘土(2色) ●粘土べら
  - 竹ひご ●ストローなど
- 参加者が持参した物：スマートフォンまたはタブレット端末



## しりあがり寿オンラインワークショップ 北斎と遊ぼう! 「古典×現代2020—時空を超える日本のアート」関連イベント

- 開催日時：2020年8月15日(土) 13:00~15:00
- 参加者：8名(参加)、74名(ライブ視聴)
- 対象：小学4年生~中学3年生(参加)、どなたでも(ライブ視聴)
- 参加費：無料 ●場所：オンライン開催(配信拠点:3階研修室A,B)
- 主催：朝日新聞社ほか ●協力：すみだ北斎美術館

### 概要

しりあがり寿さんの「ちょっと可笑しなほぼ三十六景」をお題として、これにさらに手を加えたオリジナルのパロディ作品を制作する、オンライン・ワークショップを開催しました。



プログラムの流れ

1



30分

### 参加者入室、画面や音声の操作方法の説明

入室した参加者から順番にマイクとカメラの稼働チェックを行い、背景設定などの操作方法を説明した後、緊張をほぐすために進行役が参加者とおしゃべりをしながら、ワークショップの開始時刻を待ちました。

2



15分

### 講師紹介、課題の説明、課題作品の鑑賞

13:30になると、画面にしりあがりさんが手を振りながら登場、ワークショップのスタートです。最初に、しりあがりさんの自己紹介と、今回のワークショップのお題である「ちょっと可笑しなほぼ三十六景」についてのお話がありました。そして、葛飾北斎の「富嶽三十六景」と「ちょっと可笑しなほぼ三十六景」のうち3点の作品画像を順番に画面に表示して、絵のどこに手が加えられているか探したり、しりあがりさんからパロディを考えるときの工夫についてお話を聞いたりしました。

3



55分

### 参加者の作品の発表と講評

次に、参加した子どもたちが事前に制作した作品をみんなで見ながら、考えた物語や工夫した点を発表し、しりあがりさんからコメントをいただきました。「地球から太陽まで来たけど遭難しちゃった」、「みんなでご飯を食べているときにUFOにさらわれて、お箸を忘れていっちゃった」「ETカードを落とした」など、びっくりするような展開や、くすりと笑えるストーリーの、ユニークなパロディ作品が次々と登場し、他の参加者も興味津々で画面を覗き込んでいました。しりあがりさんは一人一人に、こだわったところや物語を思い付いたきっかけを尋ね、アイデアを褒めたり、思わず吹き出したりして、「パロディのパロディ」で会話が盛り上がり、笑い声が絶えないひと時となりました。①②③④⑤⑥

講師



漫画家

しりあがり寿  
(しりあがりことぶき)

1958年静岡県生まれ。キリンビールで広告宣伝などを担当するかわら、漫画家として活動を始める。1985年に初の単行本『エレキな春』を発表。以来、ギャグ作品を中心に、震災や原発をテーマにしたアンソロジー『あの日からのマンガ』など社会派に至るまで様々な漫画を発表する一方、現代美術にも活動の幅を広げている。

進行：国立新美術館 吉澤菜摘

まとめ

しりあがり寿さんのワークショップは、元々は2020年3月に開催する計画だったものが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により中止となり、美術館の再開後の8月にオンラインのプログラムに変更して実施されることとなりました。国立新美術館を配信拠点として行う初めてのオンライン・ワークショップでしたが、朝日新聞社の手厚いサポートにより、滞りなく進行することができました。

参加した子どもたちは、オンラインのプログラムは未経験の子がほとんどだったにも関わらず、端末の操作に戸惑う様子もなく、熱心に画面を覗き込んで、しりあがりさんの言葉に耳を傾けていました。斬新で面白いパロディ作品が沢山生まれてきて、子どもたちの想像力を刺激して創造性を引き出す、葛飾北斎としりあがり寿の作品の魅力を改めて実感するワークショップでした。(NY)

材料

しりあがり寿「ちょっと可笑しなほぼ三十六景」作品画像データ





④

## 国立新美術館のヒミツ —地震から人と作品を守る工夫を知ろう!

- 開催日時：2020年9月22日(火・祝) 11:00~13:00、15:00~17:00
- 参加者：55名(第1回27名、第2回28名)
- 対象：小学3年生以上
- 参加費：無料
- 場所：展示室3Bほか

### 概要

株式会社 日本設計社員有志を講師に迎え、「免震」について学びました。これまで国立新美術館に来ている時には気づかなかった、建築の工夫に対する理解を深める機会となりました。



①



②



③



⑤

1

15分

### レクチャー

まずは、住むことを目的に設計された自分の家と、美術作品を鑑賞するために設計された美術館の違いについて考えることから始めました。生活をする場所としての家と、公共施設としての美術館が作られる設計の目的を再確認することで、地震から人と作品を守る「免震」の重要性を学びました。①

2

15分

### 免震の工夫を確認できる場所を見学する

つぎに、グループに分かれて国立新美術館の免震の工夫がごろされている場所を確認しました。免震装置は、建物の最深部にある免震層に設置されているため、実物を見ることができません。そこで今回は、注意深く観察しないと見逃してしまう建物と地面の間にある溝や橋(エクステンション・ジョイント)、ダンボールで実寸大に再現した免震装置の模型を見学しました。ガイド役の日本設計社員から、免震装置は地震が起きた際に建物を揺らさないようにするものではなく、建物をゆっくりと少しだけ動くようにして、地震の衝撃を和らげるための装置だと解説してもらいました。②③

3

60分

### 免震装置と建物の模型を制作する

今回のワークショップでは、実際に免震装置が機能している状態を体感することはできないので、それにかわる体験として、模型を作って揺らす実験を行いました。免震装置は、木の板(2枚)、紙コップ(4個)、小皿(4枚)、ピンポン玉(4個)を組み合わせて再現し、建物の模型は、ハルサの角棒とスチレンボードを使って制作しました。④

4

15分

### 揺らす実験と観察

完成した模型を観察しながら揺らして、免震装置の模型につかっただピンポン玉がある時とない時で、揺れ方の違いを確認しました。水を入れたペットボトルを重りとして建物の模型に乗せることで、何も置かずに揺らす時との揺れ方の違いを視覚的に観察することができます。さらに、スチレンボードを建物の壁に見立て、建物模型の柱と柱の間に設置することで、揺れに対する補強の感覚を身に付けました。揺れ方の実験が早めに終わった人は、建物模型の部分に人や家具を制作し、思い通りの免震ハウス模型の制作を楽しみました。⑤

プログラムの流れ



## 株式会社 日本設計社員有志

内田幸子(うちだ ゆきこ)、金崎由女(かねさき ゆめ)、小早川拓(こばやかかわ ひらく)、関根梨沙子(せきねりさこ)、東條有希子(とうじょう ゆきこ)、廣畑佑樹(ひろはた ゆうき)、宮田浩二(みやた こうじ)、紫安みずき(むらやす みずき)、山下博満(やました ひろみつ)、ロバート・ドゥウィットゥラ(※五十音順)

株式会社日本設計・黒川紀章氏と共同で国立新美術館を設計した、日本を代表する総合設計事務所。美術館や博物館の設計実績も数多く、独自の設計としては、高知県立美術館、岩手県立美術館、山種美術館などがあり、他の建築家との共同設計としては、東京藝術大学大学美術館、長崎県美術館、三井記念美術館などがある。日本設計は、2017年から国立新美術館で開催してきた建築ツアーへの協力だけでなく、国立新美術館の「運営支援企業」として、美術館の活動をサポートしている。

講師

日本設計メンバーとの綿密な打ち合わせを経て行った今回のワークショップは、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、美術館の臨時休館などが続く中で徐々に開催した対面型の企画となりました。

「免震」という美術館の見えない工夫を知る今回のワークショップをきっかけにして、教わった知識をもとに、普段の美術館とは一味違った鑑賞体験ができるのではないのでしょうか。今後も「国立新美術館のヒミツ」をシリーズ化して、展覧会鑑賞だけではない美術館の楽しみ方を発信していきたいと思っています。(MS)

まとめ

●普段は知ることが出来ない部分がテーマで、実際に建物の見学があり、とても興味深かったです。また免震の仕組みを体感できるワークショップもとてもよかったです。(大人)

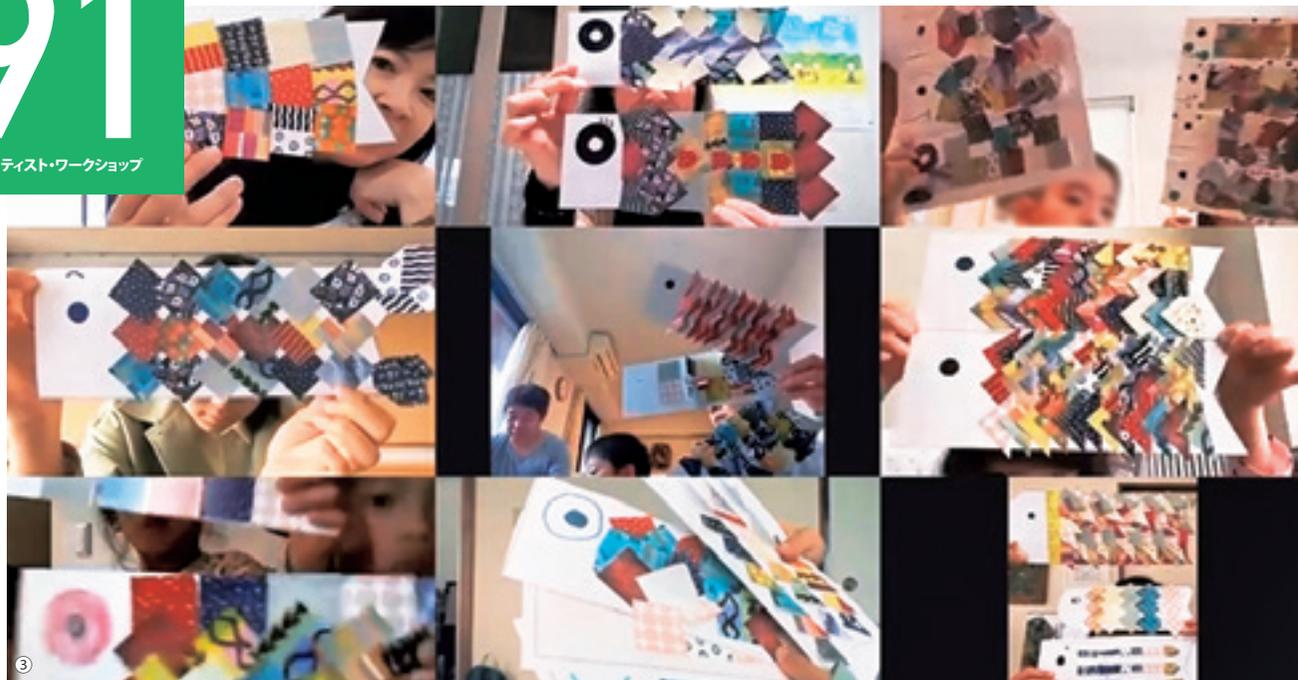
●免震装置をピンポン玉で再現して確認できたことが、とても分かりやすかったです。免震装置の材質が3種(ゴム、鉄、なまり)で、できている事、それぞれの役割がとてもよく理解できました。(大人)

●これまで本やネットからしか免震についての情報を得られずにいましたが、実際に見学させて頂くことができました。免震の模型では、水があまり揺れないというのを、自分の目で確認できたのでわくわくしました。(子ども)

参加者の感想

材料

- ・カッターマット ・カッター ・はさみ ・グルーガン
- ・延長コード ・グルースティック
- ・免震模型材料(MDF、紙コップ、ピンポン玉)
- ・建物模型材料(スチレンボード、ハルサ)



## マイ・こいのぼりなう!2021 オンライン

- 開催日時：2021年4月29日(木・祝) 11:00~12:30、14:30~16:00
- 参加者：20組40名(第1回8組14名、第2回12組26名)
- 対象：子どもから大人までどなたでも
- 参加費：無料
- 場所：オンライン開催(配信拠点:4階会議室1,2)

### 概要

自宅からでも参加できるオンライン・ワークショップを開催し、20組の参加者が紙製のこいのぼり作りを体験しました。



プログラムの流れ

- 1 10分
- 2 5分
- 3 10分
- 4 35分
- 5

### はじめに

「マイ・こいのぼりなう!」は、2018年に開催された「こいのぼりなう! 須藤玲子×アドリアン・ガルデル×齋藤精一によるインスタレーション」の会場内体験コーナーのために特別に作られた紙製のキットで、模様が印刷された紙片を自由に組み合わせるだけで台紙に貼るだけの簡単な作業で、カラフルなこいのぼりを作ることができます。展示会が終了した後も、2019年4月にワークショップが開催されて人気を博し(ワークショップ82)、2020年春にも美術館での開催が計画されていましたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により実現しませんでした。2021年4月、2年ぶりの開催を目指して、美術館に来て参加するワークショップとオンライン・ワークショップ、そして動画配信の3種類の「マイ・こいのぼりなう!」を企画しました。残念ながら、緊急事態宣言の発出により美術館で実施することはできませんでしたが、オンラインのワークショップは予定通り開催されました。

参加者には事前に制作キット一式(こいのぼりの台紙4枚、いろいろなもようの紙10枚×20種)を送付し、ハサミとペンを用意してもらいました。①

### 参加者入室、音声・カメラ稼働確認

Zoomミーティングルームに入室した参加者から順番に、マイクやカメラの稼働確認と表示名の変更を行い、ワークショップ開始です。

### スタッフ自己紹介

インストラクター役のスタッフが自己紹介した後、事前に送付したキットを開封して中身を確認しました。

### ウォーミングアップ

制作の前に、20種類の「いろいろなもようの紙」を使ったウォーミングアップ。今日の気分にあう模様を一つ選んだり、どの模様かを当てるクイズに挑戦したりしました。

### 制作

いよいよ制作です。台紙を枠線に沿ってカットしたら、20種類の中から好きな模様の紙を選んで、台紙の上に並べていきます。並べ方が決まったら、台紙の両面テープの剥離紙を剥がして、模様の紙を貼り付けていき、最後に目玉を描いたら完成です。②

### 作ったマイ・こいのぼりを発表、記念撮影

こいのぼりが出来上がったなら、カメラに近づけて、参加者同士で見せ合いました。違う模様のこいのぼりを次々と作る人もいれば、模様の紙の折り方にこだわり時間をかけて作る人もいて、それぞれ自分のペースでこいのぼり作りを楽しんでいました。③④⑤

### 講師

## 国立新美術館 教育普及室スタッフ

### まとめ

「マイ・こいのぼりなう!2021」はオンライン・ワークショップのみの開催となりましたが、遠方に住んでいても参加できる、小さな子どもと一緒に参加できる、自宅で安心して制作できるなど、オンライン開催の利点も示されるワークショップとなりました。参加者は模様の紙を使ったクイズなどで緊張をほぐした後、家族やきょうだいで途中経過を見せ合いながら、こいのぼりを作りました。模様の紙の並べ方や折り方にこだわりが見られる、個性豊かなこいのぼりが続々とでき上がり、参加者同士で見せ合うときには、Zoomの画面が和気藹々とした空気に包まれていました。(NY)

### 参加者の感想

- 親子共々大変楽しく鯉のぼり作成をすることができました。普段は触れ合うことのない年代も住む場所も違う方たちと、時間を共有しながら作業するという体験はとても新鮮で、子供達にもよい経験になったのではと思います。(5歳女子・2歳男子・30代女性で参加)
- 子どもがまだ小さいので集中し続けるのは難しいかなと思ったが、ワークショップの時間を過ぎて黙々と作業を続けていて、楽しんでいるのがよく分かった。自宅で受けるオンラインワークショップだからこそ好きなだけ続けることができて良かった。(5歳女子・2歳男子・保護者で参加)
- 大人の参加が少なかったので少し恥ずかしい思いもありましたが、作業自体は大人も子どももそれぞれのペースで楽しめるもので、かつ、子どもたちの自由な感性がどんどん広がっていくのを見ることが出来て、大変貴重な時間だったと思います。(50代女性)

### 材料

・「マイ・こいのぼりなう!」制作キット(台紙、いろいろなもようの紙) ・ハサミ ・ペン

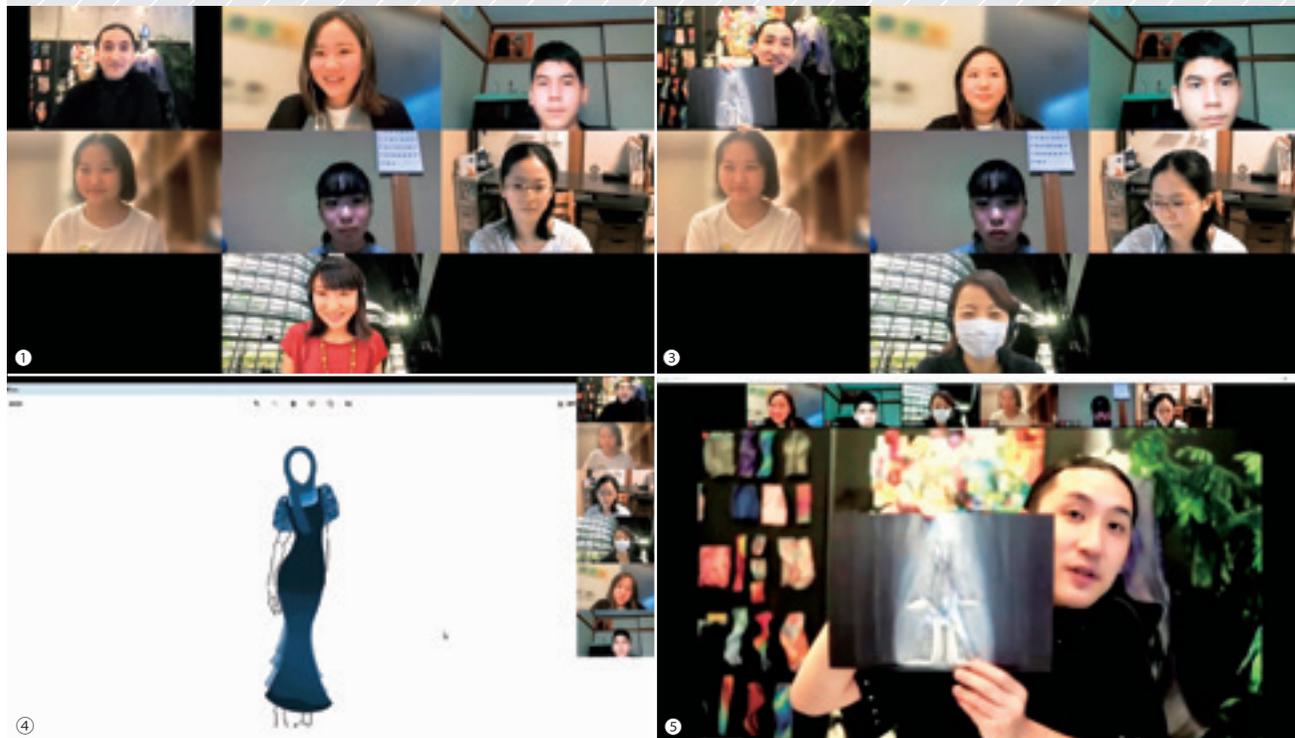


## YUIMA NAKAZATO FASHION PROGRAM 10代と考える、ファッションと未来

- 開催日時：2021年8月22日(日) 14:00~16:00 「ファッションインジャパン 1945-2020—流行と社会」展関連プログラム
- 参加者：5名(参加)、55名(ライブ視聴)
- 対象：中学生・高校生(参加)、どなたでも(ライブ視聴)
- 参加費：無料
- 場所：オンライン開催(配信拠点：4階会議室1)

概要

ファッションデザイナーの中里唯馬氏を講師に迎え、ファッションの現在と未来について考える対話型ウェビナーを行い、10代の参加者とオンライン上で語り合いました。



プログラムの流れ

- 1 5分
- 2 30分
- 3 20分
- 4 40分
- 5 10分
- 6 5分

### 講師紹介・展覧会紹介

クラフトマンシップとテクノロジーを調和させた服作りに挑むファッションデザイナー、中里唯馬さんの作品は、「ファッション イン ジャパン 1945-2020—流行と社会」展でも「未来のファッション」として紹介されています。

### トーク「ファッションデザイナーになるまで」

日本人最年少でアントワープ王立芸術アカデミーを卒業した中里さん。ファッションデザイナーになることを決めてから自身のブランドを立ち上げるまでのエピソードをはじめ、現在取り組んでいる人工合成タンパク質を使ったサステナブルな服作りについてお話を伺いました。

### ディスカッション

中里さんのお話を受け、中高生から様々な質問が。「流行は繰り返すって本当ですか?」「どうして皆さんの服が廃棄されてしまうんですか?」「何が好きだってどうやったらわかるんですか?」などの率直な問いに中里さんがわかりやすく答え、ファッション業界の仕組みや、服を着ることについて考える時間となりました。①

### デザイン画講評

中高生には、事前に「未来のファッション」のデザイン画を提出してもらい、中里さんと本橋研究員(「ファッション イン ジャパン 1945-2020—流行と社会」展を担当)による講評を行いました。着物を組み合わせたデザインや、宇宙でも着られるスタイル、環境への配慮を取り入れた素材などの様々なデザイン画。中里さんからは、デザイン画を描く際のアドバイスに加え、自分が高校生の頃に描いたデザイン画や、愛用している文具や素材の紹介もありました。本橋研究員からは、日本ファッション史の視点を踏まえたコメントや、中高生への質問もあり、双方にとって貴重な交流となりました。②③④

### 視聴者からのQ&A

ウェビナー視聴者からのQ&Aコーナーでは、「デザイナーにとって一番大切なことは?」「コロナ禍でファッションはどう変わった?」「アートとファッションの関係についてどう思いますか?」など多くの質問が寄せられ、ファッションの今についての課題意識を皆で共有しました。⑤

### リフレクション

最後に、中高生参加者と中里さんから感想を発表。中高生からは、「デザイナーは自分とかけ離れた存在だと思っていたけれど、身近に感じられるようになった」などの声もあり、世代を超えた対話が、新たな繋がりを生みだしたことを皆で実感しました。

講師



ファッションデザイナー  
**中里唯馬**  
(なかざと ゆいま)

1985年生まれ。2008年、ベルギー・アントワープ王立芸術アカデミーを卒業。2015年に「株式会社YUIMA NAKAZATO」を設立。2016年7月にはパリ・オートクチュール・ファッションウィーク公式ゲストデザイナーの1人に選ばれ、コレクションを発表。その後も継続的にパリでコレクションを発表し、テクノロジーとクラフトマンシップを融合させたものづくりを提案している。また自らが発起人となり、2021年7月より、未来を担う次世代のクリエイターのためのFASHION FRONTIER PROGRAMを創設。オートクチュール・ファッションウィークを通じて最先端のファッションを提案しながら、社会的課題にも取り組む。

進行：国立新美術館 山際真奈  
デザイン画講評：国立新美術館 本橋弥生

まとめ

ワークショップの様子をウェビナーとして配信する、初の試みとなった中高生プログラム。参加者の率直な問いを誠実に受け止め、丁寧に対話を展開していく講師の様子や、中高生の顔に浮かぶ発見や驚きの表情が印象的でした。ライブ視聴者からも、「生き方、考え方など改めて見直すきっかけになりました」との声があり、ファッションと日々の生活の関係性について、共に学び合うことのできる充実のプログラムとなりました。(MY)

参加者の感想

- みんなの描いたデザイン画をみると、本当に個性豊かでファッションってまさにまさにアートなんだなって思いました。(参加者、14歳女子)
- いつもあまり考えずに服を着ていましたが、これからは雑誌を読むときもファッションにも少し目を向けてみようと思いました。(参加者、15歳女子)
- サステナブルファッションという長く愛される服について興味が出てきて、自分と服との関わり方を更新する重要な機会になりました。(視聴者)
- 高校生の素直な疑問が新鮮でおもしろかったです。(視聴者)
- ファッションのことはもちろんのこと、生き方、考え方など改めて見直すきっかけになりました。(視聴者)



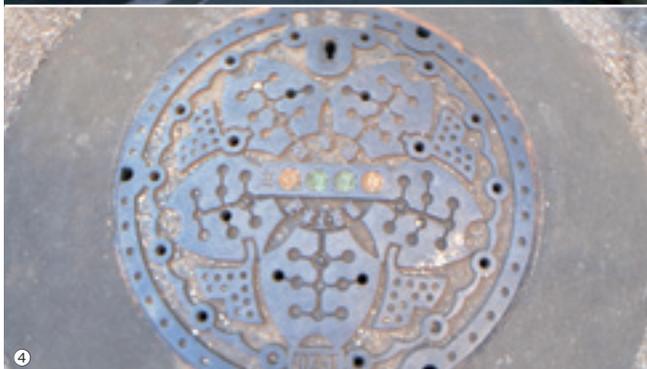
## PAN- PROJECTSとのオンラインセッション： 人の営みと物質をめぐって

PAN- PROJECTS《The Matter of Facts》関連イベント

- 開催日時：2021年11月5日(金) 19:00~20:00、  
11月12日(金) 19:00~20:30
- 参加者：10名
- 対象：高校生以上 ●参加費：無料
- 場所：オンライン開催(配信拠点：4階会議室1)

概要

建築家ユニットのPAN- PROJECTSと共に、人の営みから生まれる「パイプロダクツ」について考え、語り合うオンラインセッションを行いました。



プログラムの流れ

1 10分

### <1日目>講師・参加者紹介

建築家ユニットPAN- PROJECTSによる作品《The Matter of Facts》は、国立新美術館のパブリックスペースで展示されています。参加者は、事前にPAN- PROJECTSの作品解説動画を視聴して参加し、それぞれ興味や関心があることについて自己紹介しました。

2 30分

### 講師によるレクチャー

東京都内の公共機関や商業施設で発行された広報物、とりわけコロナ禍で中止・延期となったイベントなどの印刷物を用いて、「都市の記憶」として再提示した《The Matter of Facts》。制作の経緯や「パイプロダクツ」について、PAN- PROJECTSからお話いただきました。①

3 10分

### 「パイプロダクツ」を探す練習

《The Matter of Facts》で使われた印刷物のように、人や都市の営みから生まれる「パイプロダクツ」は、その一つ一つにストーリーがあります。参加者自身が、身の周りにある「パイプロダクツ」を見つけ、その背後にある意味や物語について考えてくることを次回までの課題とし、その「見つけ方」の練習をしました。

4 10分

### 参加者からのQ&A

どこまでを「パイプロダクツ」とするのかという判断の仕方について、参加者から質問が。「人の営みによって」生まれる要素に着目しながら、講師が様々な例を用いて説明しました。

1 60分

### <2日目>グループワーク

マスク、マンホール、バス停、電線、コンタクトレンズなど、全国から集まった参加者達が多種多様な「パイプロダクツ」を見つけて再集合。撮影した「パイプロダクツ」の写真と、そのストーリーについて、2グループに分かれて発表しました。②③④⑤

続いて、見つけた「パイプロダクツ」にはどんな意味や性質があるのかについて話し合います。普段は気に留めることのないモノに注目することで、自分自身の生活と記憶、同時代の文化の関係性を考えなおす時間となりました。

2 20分

### 各グループのディスカッションについて共有

各グループの議論を共有する中で、「パイプロダクツ」について考えることが、日常を新しい視点から捉えなおすきっかけとなることを実感しました。

3 10分

### 講師・参加者からの感想

参加者からは、「いままで気づかなかった「もの」や「こと」に気づききっかけになりました」との声も。「パイプロダクツ」をめぐるあつという間の2日間、全国各地とロンドンを結んだオンラインセッションは、名残惜しい雰囲気の中で締めくくられました。⑥

講師



### 建築家ユニット PAN- PROJECTS (パンプロジェクト)

八木祐理子(やぎ ゆりこ)  
高田一正(たかだ かずまさ)

ロンドンを拠点にする建築設計事務所。2017年に八木祐理子、高田一正により設立され、ヨーロッパを中心に活動している。多様な社会を尊重し、推し進める建築の在り方を目指す。主なプロジェクトに《Paper Pavilion》(コペンハーゲン、2017)、《The Playhouse》(東京、2020)など。CHART ART FAIR 最優秀賞(2017)、ヴェネツィア・ビエンナーレYEA入賞(2021)、他受賞多数。

まとめ

講師の2人が暮らすロンドンとの時差も考慮して、平日夜の時間帯で行った2週連続のオンラインセッション。様々なバックグラウンドを持った参加者と講師が、身近なモノをめぐって対話を進めていく様子に、多様な参加者に開かれた新たなワークショップの可能性を感じられたように思います。人の営みとモノとの関係性や物語を捉えなおす試みに、他者との対話だけでなく、参加者が自分自身との対話を深める時間ともなっている様子が印象的でした。(MY)

参加者の感想

- 自分はコロナによって閉塞感を感じていたり、22歳になるまでの自分の考え方にとらわれて窮屈な感覚を抱いていた。このセミナーを通じて新しい物事の捉え方を、パンプロジェクトのお二人から学び、またそれを実践した結果を他の人と共有しあうことで少しそれらが解消されたような気がする。(20代男性)
- 一つのBy-Productを通して、そのものの変化や自分たちがそれに対して思う印象によって、社会がどのように変化するか、したかを見ることができると学んだ。(20代男性)
- 対象物にストーリーを思い浮かべることで、記憶の片隅に残る思い出に想起し、殺伐としたコロナ禍でも、生活の「ゆとり」や「余白」を感じられ幸せを感じた次第です。このワークショップへ参加することで、自分の考える答えに少し近づけた感触があり、新たなスタートへ行ける勇氣にもなりました。(40代男性)

材料

参加者が持参した物：身の周りにある「パイプロダクツ」に関する文章・写真





## 視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ

「庵野秀明展」関連プログラム

- 開催日時：2021年12月14日(火) 14:00~16:00、18:00~20:00
- 参加者：31名(第1回15名、第2回16名)
- 対象：どなたでも ※手話通訳つき
- 参加費：1,000円
- 場所：企画展示室1E、1階ロビー

概要

障がいの有無など様々な違いを持った人が集まり、「庵野秀明展」の作品について「見えること」、「見えないこと」、「印象や感想」を言葉にすることを通して、「アニメをどのように経験しているのか」を考えました。



1



2



3



5

プログラムの流れ

1  
15分

### 開始挨拶、展覧会紹介、流れ説明、スタッフ紹介

休館日の火曜日、「庵野秀明展」を開催している企画展示室1E前のカフェスペースを使用し、7、8名ずつが2グループに分かれて輪になって座りました。まず、展覧会担当研究員から、「庵野秀明展」の概要を紹介し、続いて「視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ」林さんがワークショップについて説明します。林さんは「見えること」「見えないこと」「分からないこと」と書かれた紙を示しながら、言葉を通して作品を鑑賞することで、参加者それぞれの視点をワークショップで共有してほしいと話しました。①

2  
20分

### 自己紹介

それぞれのグループの中で、自己紹介に加え「庵野秀明展」にどのようなつながりを持っているかを話します。

3  
75分

### 展覧会を周りながら対話鑑賞

実際に展示室に入り、2グループに分かれて作品を鑑賞します。鑑賞するのは、ナビゲーターが事前に選んだ3点ほどのアニメーション映像や設定資料など。作品を鑑賞しながら、見えていること/見えていないこと/わからないことについて、参加者同士が言葉にすることによって深めていきます。②③④⑤

4  
30分

### 振り返り、アンケート

鑑賞を通しての体験や気づいたことについて、グループ内でシェアします。作品それぞれについて感じたこととは別に、参加者によってさまざまな視点や経験を話すことで、共通の体験を再解釈することができました。



## 視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ

林建太(はやし けんた)  
藤本昌宏(ふじもと まさひろ)  
衛藤宏章(えとう ひろあき)  
永尾真由(ながお まゆ)

ナビゲーター

2012年始動。スタッフは視覚障害者と晴眼者で構成されている。月一回のペースで全国の美術館や学校で目の見える人、見えない人が言葉を介して「みること」を考える鑑賞プログラムを企画運営している。最近の主な活動は2017年から継続している東京都写真美術館での鑑賞プログラムや、演劇の俳優大石将弘(ままと、ナイロン100℃)らと制作した「きくたびプロジェクト 横浜美術館編」など。2020年以降は主にオンラインの鑑賞プログラムを通して、芸術へのアクセシビリティや「みること」について誰もが気軽に安全に語り合える場づくりを目指している。

まとめ

自分とは異なる身体を持つ他者を想定しながら作品について話すことで、参加者が自分自身の感覚や感性について見つめなおす機会になったと思います。一見すると自分と同じように見える人でも、違う視点や経験をもって作品を鑑賞していることに気づく鑑賞会でした。今回のワークショップで題材とした「庵野秀明展」にはポピュラーな作品も多かったため、バックグラウンドとなっているアニメと個々人の関わりや、世代の違いなどが新たな発見として浮かび上がりました。(S)

参加者の感想

- 色んな人と話せたり、自分の中のモヤモヤがいい感じに生まれたり、色んな作品が見れて、聞けた。(10代男性)
- 一つの作品を見ながら、しかも背景が様々な人たちで自由に話をするのはとても新鮮でした。また、アニメを言語化することの難しさや、目を閉じてほかの人が言語化した作品を聞いた時と自分の目で見た時の印象が違うなど、美術鑑賞において多くの発見がありました。(40代女性、障がい有)
- ひとつの作品で人によって捉え方がこんなにも違うのかと驚いた。(40代女性)

エッセイ

## 「まっすぐ」と「ぶらぶら」を行き来する

林建太

㉑ ㉒ ㉓ 視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ (2017、2019、2021年)

### ・属性に縛られる私たち

「視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ」は目の見える人、見えない人、様々な属性の人が集まって作品について、見えること、見えないこと、分からないこと、を言葉にしながらかそれぞれの「みる経験」を語るプログラムだ。ここでは参加者同士が偶然に「他人」として出会うことを大事にしたいと思っている。

例えば「目の見える」属性の人と「目の見えない」属性の人が美術館で居合わせた時に「目の見える人＝説明する役」「目の見えない人＝説明を聞く役」と自動的に役割が決まってしまうことがある。全盲のスタッフの中川さんは「一方的に説明をされればされるほど自分が視覚障害者の立場に立たされる窮屈さを感じる」という。私たちは「視覚障害者」「晴眼者」「男性」「女性」「その他の性」「親」「子供」など、様々な属性によって関係や役割を規定されてしまう。だからこそ、ワークショップではどんな属性の人も「他人」として出会い、支援の関係でも、仲良しの友人でも、家族関係でもない、見ず知らずのまま素朴に会話できる場にしたいのだ。そのためにワークショップでは「まっすぐモード」と「ぶらぶらモード」という2つの語りのモードをお伝えしている。

### ・2つのモードを併せ持つ

「まっすぐモード」とは例えば「説明」のように目的が明確なモード。ガイド的な言葉が重要で、「説明する人」「聞く人」と役割が固定しがちである。「見えない人に絵の視覚情報を伝える」場面はまっすぐモードだ。対して「ぶらぶらモード」とは「雑談」のように語りの目的が曖昧で、話が横道にそれまくる行き当たりばったりなモード。ここでは目的に縛られない思いつきの言葉が重要だ。話がコロコロ変わるので主導権を持つ人がいない。つまり役割が固定化しにくいモード。2つのモードを併せ持つことで見える人はいつも見える人らしく語る必要はないし、見えない人はいつも見えない人らしく聞き入る必要もない。役割を固定せず「他人」のままで居合わせることができるのだ。

### ・文脈を編み直す

2021年12月国立新美術館、庵野秀明展でのワークショップの場面。アニメをよく見る人や見たことがない人、アニメーションの異なる文脈(コンテキスト)を持つ人々がアニメを鑑賞した。目の見える参加者から「右から左に向かって軽自動車走っています」とまっすぐモードの説明。「どんな場所?」「色はついてるの?」「見えない人からの質問が続く。「なんか車が可愛い」「なぜ!?!」「人間が描かれてないから車に感情移入しているのかも」というぶらぶらモードの思いつきの印象も共有される。そして「なぜ走っているように見えるのかな?」誰ともなく語られた根本的な疑問を皆で考える。「地面の線や煙が右に動いているから車が左に走り出す」「車体が上下に振動するとスピードが生じる」。アニメを目で経験する人、アニメを言葉で経験する人、それぞれの経験が言葉で翻訳されることで、ここでは誰かにアニメーションを教わる場ではなく、誰かとアニメーションの文脈を編み直す場所となっていく。アニメーションについて、絵画について、写真について、映画について、さらには社会に埋め込まれた様々な文脈を知らない誰かと編み直すためにこそ、私たちには安全に他人と出会える場所が必要なのだ。

## ワークショップ雑感

須藤玲子

㉔ さいのぼりなう!ワークショップ (2018年)

2018年4月11日から5月28日まで、国立新美術館において、異なるテキスタイルでつくった319匹のさいのぼりが泳ぐインスタレーション、「さいのぼりなう!」を展示した。この展示に関連して、4月29日には親子で参加できる「さいのぼりなう!ワークショップ」を行った。このワークショップについて、少し述べたい。

NUNOでは、ワークショップは国内国外、屋内屋外を問わず、様々なテーマのもと、数えきれないほど行ってきた。例えば、金属の錆を写しとって染める技法「さび染め」、水溶性布に糸、布を縫い付け、基布を溶かす技法「ケミカルレース」、セルロース繊維を酸で焼く染め技法「バーンアウト」などを使ったワークショップである。ワークショップの対象者も多彩で、大学などの教育機関の教員、研究者、アーティストから、子どもに至るまで、性別、年齢、国籍も多様である。

さて国立新美術館でのワークショップでは、主として子どもたちを対象とし、「卓上に置けるミニサイズさいのぼり」をつくることとした。材料は誰もが毎日触っている布地を使う。布地は、美術館に展示した巨大なさいのぼりの製作時に発生した残り布だ。素材は、土から生まれた植物繊維、蚕がつくる絹、羊の毛、パルプから生まれたレーヨン、石油が原料のナイロン、ポリエステル。そして染織技法は織物、染物、刺繍、編みと様々である。素材は多様であるが、色、模様、風合いもさらにとりどりであり、その数さいのぼりと同数の319種類。すべてさいのぼりのハグレだが、丁寧にアイロンがけをし、一枚ずつカット。NUNOメンバー全員で準備した。私たちが材料の準備をしているとき、ホテルや邸宅の内装建具や特注家具を専門にする家具会社ヒノキ工芸を主宰する戸澤忠蔵氏が、卓上さいのぼりの台座を用意してくれた。戸澤さんの工房で木工の専門家全員が樹種を選び、技術を駆使し、工芸品のような台座をつくってくれた。

ワークショップ当日は、戸澤さんが届けてくれた数百個の美しい台座と、カットした一万枚近い布地、NUNOから6名のメンバーがスタンバイ、実にたくさん子どもたちの参加があったので、私たちの気分も自然に高揚した。とはいえ、子どもたちにとってはワークショップは初めての経験。まずは、布地とは植物、動物、そして石油からできていることを画像をつかって説明し、それらをつかった布地で「卓上さいのぼり」をつくること、そしてそのプロセスを説明した。伝え終えたときには、参加者はすでに好みの布地を選び始めていた。それぞれが自由に独自の発想により布地を組み合わせ、制作を始めた。

現代の子どもたちが最も夢中になる遊びといえばコンピューター・ゲームだろう。バーチャルな遊びは、決められたルールに従って処理をするために脳と指を使う。一方で素材をつかったワークショップは、制作過程で様々な発見があり、解決する方法を考え、それらをこなして完成へと至る。完成するまでのプロセスを見つけるため、脳と指が活性化される。そのプロセスは実に多様であり、一人一人異なる。子どもたちにとっては充実した時間となったはずである。

多くの子どもたちが参加するワークショップは初めての経験であったが、何ら不都合は発生せず、最後までスムーズに、かつ内容の濃いワークショップを行うことができた。美術館に来ること、またワークショップなどの活動とあまり縁のない子どもたちに、一日ではあるが「つくる」機会を提供できたことは良かったと感じる。ここでの経験が、少しでも子どもたちの記憶の中に残ったら、私たちが未知なるワークショップへの水先案内をすることができたら、意義ある活動だったと言える。

## センス・オブ・ワンダー、そして夢中になることの素晴らしさ

大隅秀雄

⑤ バランスっておもしろい! 風で遊ぶ 真夏の自由研究 (2018年)

近年、教育基本法の改正で小学校中学校の図画工作の時間が大幅に削減されてしまいました。さらに進む勢いようです。高校の美術なども同様です。自分が小中学生の頃と比べると時間数が半分近くになってしまっている学年もあります。いちばん楽しくとても大切なものだったのでどうして減らされてしまったのでしょうか。

様々な教科に分けられて学んでいるものを、ひとつの知恵としてつなぎ合わせる重要な役目を果たしている図画工作に危機が訪れています。

そんなこともあって非常勤講師として勤めている大学では、「大学生に図画工作を!」をスローガンにして授業に臨んでいます。レイチェル・カーソンが述べている「センス・オブ・ワンダー＝神秘さ不思議さに目をみはる感性」を磨き、知識としてではなく経験を通して感受性豊かに育てて欲しいという思いからです。

このお話をいただいた時、ちょうど福岡伸一さんの『ルリボシカミキリの青』を読み終わったばかりでした。著書の中の少年時代のエピソードです。見たことのない虫のことで質問に行った国立科学博物館の先生が福岡少年をひとりの研究者として扱ってくれたことが、科学者の道に進むきっかけのひとつになったとありました。とても素晴らしいことだと思います。

このような体験をひとりでも多くの子供たちにと、このワークショップは小学生高学年を対象としたプログラムでしたが、あえて大学生の実材演習と同様の内容で取り組んでもらいました。

石とチタンとアルミというかなりハードな材料を使い、参加者全員それぞれひとりの表現者としてバランストイ(ヤジロベ)を制作します。まず、大学の授業のようなスライドレクチャーで説明です。それから、ワークショップのウォーミングアップとして、河原で拾い集めて準備した石を積んでストーンバランスに挑戦してもらいました。つるんとした石、ゴツゴツした石、丸い石、三角の石、などの中からそれぞれが好きな形の石を探し出し、2個から始めて3個4個5個と、重ね合わせていきます。こちらはあらかじめ練習を重ねておいてデモンストラーションをして5個ぐらいでバランスをとってみんなに披露しました。すごい!できるんだ~!ってなりました。そのあとは、みんな夢中になって崩れないように色々工夫をして、バランスをとって積み重ねていました。すごく面白いんですね、これで一気に集中力とテンションが上がりました。

ここからが本番です。バランスを取るためのおもりとしてウォーミングアップで使った石を使い、穴を開けたり、アルミ線を曲げたりひねったり、差し込んで接着したりネジで止めたりもします。

もう1つの挑戦は、大人でもなかなか経験できないようなものです。

用意したチタン板は厚さ0.5mmで直径60mmと40mmの円盤を各1枚ずつ、これを陽極酸化という方法で発色させていきます。みんなゴーグルをして、ちょっと危険な硫酸を含んだ電解液にチタン板を浸して電気を通します。ピリっとしないように漏電防止装置をつけたスライダックスで電圧を変えると虹の様にさまざまな色に変化します。10ボルトではこの色、15ボルトでこの色、20ボルトでこの色という具合に試していきます。参加者は交代で装置を使うので、順番を待つのがもどかしそうにしながらも、さてどんな風に色付けしようかなと、他の人の作業を見守っていました。試行錯誤を繰り返し思い思いの色合わせを楽しみながら仕上げ、その出来上がった綺麗なチタン板と石などを自由に組み合わせ造形して、最終的にバランスをとって完成です。

このワークショップでは親子でそれぞれ別々の作品を制作してもらいましたので、最後にお父さんやお母さんたちと一緒に作品を並べての講評会となりました。

みんな自分の作品の出来に満足した様子で、とても素敵な笑顔が見られました。さて、未来のアーティストの誕生秘話となるでしょうか。良きライバルたちのワークショップ終了~!

## 影のメリーゴーランド

原倫太郎

⑦ 影のメリーゴーランド (2018年)

影を使った表現は、私の創作の原点でもあります。1995年、大学時代の学園祭で体験型の廻り灯籠を作ったのから始まり、2008年台湾で行った参加者の影をトレースしてペンキで塗りつぶしたワークショップからなる展示「影祭り」、また「大地の芸術祭 越後妻有トリエンナーレ2015」では、かつて賑わいのあった津南の旅館の大広間で巨大廻り灯籠を10燈程度作り、半透明スクリーンを数十枚垂らして鑑賞者がその中を歩く幻想的なインスタレーション「ファンタスマゴリア」を展開しました(共に原倫太郎+原游)。影はプリミティブな映像であり、18世紀末にフランスで流行った幻灯ショーのファンタスマゴリーや、日本では江戸時代に夏の風物詩の一つとして親しまれていた廻り灯籠、現代美術ではフランスのアーティスト、クリスチャン・ボルタンスキーの作品を持ち出すまでもなく、様々なアーティストが「動く影」を表現方法として使っています。

今回行ったワークショップ「影のメリーゴーランド」は、親子参加となったわけですが、どちらかといえば子どもというよりは、予想外にも親御さんが奮闘した内容になりました。子どもは大きな白い型紙の上に寝転がって自由にポーズを取ります。そして親御さんが子どもの等身大のシルエットをマジックでトレースした後、親子が協力してハサミで周囲を切り、体の中に穴を空け、カラーセロハンを貼っていきます。まだ小さい子どもなどは、「ママ、ここに穴を空けて!」、「赤い色のセロハンを貼って!」など親御さんに指示を出す姿は、いつもの関係が逆転しているようでした。

そしてこれは第一部で、第二部はみんなのシルエットを4台の回転機に吊り下げ低速で回転させます。今回たまたま展示室が空いていたこともあって、高さ5メートル以上もある巨大な影絵ショーを展開できたのですが、電気が消えて巨大な回転する影が現れると、みんなから「ワーツ」と歓声上がり、共有体験の瞬間が生まれました。通常、人間の影は常に自分にくっついている訳ですが、切り離されて回転する分身はもうひとりの自分でもあり、生き生きと回転する姿は、影が子どもたちに明るい未来を切り開いてほしいというメッセージを送っているようにも見えました。

「影のメリーゴーランド」は、その後、川口市立アートギャラリー・アトリアで「影の追いかけてこ」、渋谷公園通りギャラリーで「影のワンダーランド」へと発展し、台湾での展開とはまた違う形式のワークショップ+展示という、自身にとって新しい扉を開いた重要な機会となりました。

子ども向けのワークショップは、展示主体のアーティストである自分にとって正直サブ的な行為だと思っていましたが、参加者が単に完成物を作るのではなく、それぞれが作った作品を一堂に介してインスタレーション的な展開に広げることができ、正に今回アーティストと参加者とのコラボレーションになったと思います。そして「影のメリーゴーランド」はマイフェバリットの音楽家、竹村延和の「こどもと魔法」の世界感が表出した時間と空間でもありました。

近年、私は原游と共に子ども達が純粋に楽しめる体験型のインスタレーションを多く作っています。ハイアートが好まれる現代美術界において、我々の活動はなかなか評価されづらい面もありますが、美術はすべての人々に開かれなければなりません。幼少時の美術体験が将来に良い影響を与えると信じています。重要なのは、子ども向けのアートではなく、子どもが楽しめるアートです。そしてプリミティブな体験です。よく「アーティストは子どものようだ」と言いますが、ということは同時に「子どもはアーティストのようだ」とも言えます。小さなアーティストと今後も様々な共有体験を作っていきます。

そして最後に、美術館のスタッフの方々の綿密な準備やスムーズな進行があつたワークショップであつたことは言うまでもありません。当日大寝坊して遅刻しそうになり、開始時刻ジャストに会場入りしてそのままスタートしたのは今では笑い話です。

## 「みんな」で作ったぼんやり階級名刺

風間サチコ

㊹ ぼんやり階級名刺をつくろう! (2019年)

たった2年前のことなのに、なんだかとても遠い昔の出来事のように感じる…。国立新美術館のワークショップでワイワイガヤガヤとマスク無しで皆さんと過ごした時間は、コロナ禍の波を幾度も乗り越えた今になってみると、ほんのりと心温まる楽しい思い出です。

私の作品《ぼんやり階級ハンコ》を下地にしたワークショップ「ぼんやり階級名刺をつくろう!」実施日の2019年2月17日。あの頃から私の生活は怒涛のように忙しさを増し、大きなアワードの受賞や大小様々な展覧会が立て続けにあり嬉しい反面、まさに「忙殺」の言葉そのまま制作活動に没頭しました。必然的に人との交流が減って一人時間が増えた中でのコロナ感染対策の人同士の「非接触」推奨です。

もともと小中学校と不登校児で、たまに行く学校での友達作りの難しさから積極的なコミュニケーションを放棄し、一人ぼっちの方が気楽に思えるタイプの人間なので、コロナ禍でのステイホームは全然苦にならず、寧ろ世界中の人々が揃って自宅待機しているというシチュエーションに(不謹慎ですが)安堵感を覚えたほどでした。そのような個人主義的な自分の性格に対する反省を含め、孤独な人間特有の自意識や自嘲、また社会的な位置付けや特性に呼び名を付けて卑下したり、何となく受け入れて自称したりする世間の有様を観察し、作品にしたものが《ぼんやり階級ハンコ》です。

このハンコには戦前からある階級を示す呼称や現代のネットスラング、または差別用語に近いような言葉が彫られています。例えば、数年前に流行った「ニート」という無職で半ば引きこもりのような人物を指した言葉があります。これは他者からの侮蔑の言葉でありながら、場合によっては「俺はニートだから」と言った具合に、開き直った態度で周囲に甘えと諦めを強要するようなニュアンスにもなります。このように「自分は何者か」を人に伝えることは、自虐ですら他者に認知される安心感につながるのです。

私自身がそれに気がついたのは美術家になってからです。子供時代に多数の人と触れ合わなかったせいか、人の顔と名前を覚えるのが今でも苦手なのですが、今では「美術家の風間」と知ってもらえたことで、お会いした人の方から「風間さん」と声をかけてもらえます。これは本当に有難いことで、肩書きとは何と素晴らしいものか!と感激し、だいたい生きやすくなりました。…自分は誰で、どんな人物なのか。お互いに知るきっかけは名刺一枚でも可能で、もしそこに個性的なフォントで変な肩書きや呼称が添えてあったら…他人と自分を認識する時間がぐんと短縮されるのではないのでしょうか?

ナンセンスなコミュニケーションツール『ぼんやり階級ハンコ名刺』を皆さんと作った時間。予想以上に一人一人がシビアに自己分析し、そこから自分を表す言葉と文字の形を真剣に考えてくれました。「こんな小さな子がカッターナイフを使っても大丈夫かしら?」と心配だった小学生の女の子は「私は目黒に住んでいるから」と『めぐろ女子』という「港区女子」をもじったおしゃまなハンコを作って、大人の参加者をびっくりさせていたり、各自が潜在能力を存分に発揮し大いに盛り上がったワークショップでした。(これを書きながら完成後に撮影した全員の名刺の写真を見て、一枚一枚のエピソードを思い出して「フフフ」と一人で笑っています。)

マスク着用が普通になってしまった今、表情が目でしか伝わらず不便を感じますが、どうしたら不便さを面白く克服できるか?2年前のワークショップに参加した皆さんが、あの時の発想力を活かしてくれてたらいいなあと思いつつ、肩越しに作業を覗き込みながらお喋りしたり笑ったり、そんな賑やかな場が近いうちに戻ってくることを願っております。

## 六本木の美術館をたっぶり聞いてみよう—想像する音、創造する耳

三原聡一郎

㊸ 六本木の美術館をたっぶり聞いてみよう—想像する音、創造する耳 (2019年)

今回のワークショップのテーマは音だ。少し仰々しいが、私のキャリアの源泉であり思い入れのある世界だ。ならばヴィジュアルアートにて音が具体的に聴取の対象として扱われてきた1世紀程の歴史を凝縮しようと試みた。とはいえ表向きは子供向けである。小難しいことは抜きに、遊び心に基づいて、工作の延長が色や形態といった視覚的な側面だけでなく、意識が耳に傾けられる様なメニューにした。

まずは、この場で鳴っている音、全ての環境音に集中するゲームとして、カナダの現代音楽家R.マリーシェーファのサウンドエデュケーションを導入して始めた。その後、参加者の自己紹介と共に、意識した音の一つ述べてもらった。あえて触れなかったが、全ての音を等価に扱うべく、自身の発する音へ意識を向けている参加者が数人居たことに、僕は静かに感動していた。

その後は手を動かして耳の拡張として厚紙でのラッパ製作、そして木とネジによる有機的なさえずりのする音具制作を行った。聴覚の変容を促す装置、そして無機物が有機的な響きを獲得していく演奏の意識を両手に、静かな制作室を飛び出した。

美術館を囲む小さな森では野鳥の存在を意識し、また館内に戻って何も置かれていないホワイトキューブでの空間自体の響きを確かめながら、耳でお散歩を楽しんだ。

何を聴いたら良いかわからない、探せないという顔も見かけたが、僕は、提示された音以外を自由に聴くことに実は慣れていないのかもしれない。音の意味をはぎ取ってみると、純粋な響きは空間であり、素材でしかない。

散策を楽しんだ後、音とは何か?という根本的な事実を共有してみた。音とは空気振動であり、この世の全ての音は純粋な波を重ね合わせることで原理的に生成可能である。とフーリエを意識しながら、人工的な純音をみんなで聴いてみた。コンピュータによって可聴域を意識しながら正弦波を聴いてみるのが容易いデジタルメディアの時代に生きる特権である。超低音として知覚される風、そしてソナーや特定種のコミュニケーションに使われる超音波も同じ空気振動である。また「わんわん」などに人に話すトーンで言っても聞こえてはいないのだよと、他の生物種の知覚についての話を添えてみた。ともあれ、地響きのような超低音からコウモリとの交信を可能にする超高周波まで、純粋な正弦波のうねりを聞くことは滅多にないだろう。不思議な高揚感と共に、参加者の目が一様に丸くなっていった様な記憶がある。

人間の感覚を生成する現象や知覚のメカニズムが科学的に把握され、また全ての音を合成する方法論が確立されている現在、僕ら人間の聴取を主とした想像力は、更に先に進めるのだろうか?その役割を担うのは専門家なのだろうか?このことこそ、現在進行形で芸術家が追求している命題であると感じている。このワークショップで僕が伝えたことは、その地平に立ってみる為の、前提をシェアしたまでに過ぎない。このワークショップを通じて、先入観の少ない耳で環境を捉えていく表情を目の当たりにすることは、非常に貴重な時間だった。

ワークショップを担当した国立新美術館スタッフ

教育普及室

今井祥子

澤田将哉\*

杉本雅晃

真住貴子

山際真奈

吉澤菜摘

渡部名祐子\*

(\*は退職者)

インターン

竹ノ下彩香(平成27、28年度)

森崎由衣(平成27、28年度)

高橋梨佳(平成28、29年度)

浦有希(平成29、30年度)

大岩郁穂(平成29、30年度)

中村公彦(平成30年度)

濱野夏帆(平成30年度)

今関友里香(令和元年度)

塚田匠(令和元年度)

林早紀(令和元年度)

井口茉優(令和2年度)

石井まどか(令和2年度)

鈴木颯良(令和3年度)

林直央(令和3年度)

吉岡直哉(令和3年度)



Canon

国立新美術館の教育普及活動は株式会社日本設計、キヤノン株式会社よりご支援  
いただいております。

## やってみよう、アート

国立新美術館ワークショップ記録集 2017年3月ー2021年12月

編集 国立新美術館 教育普及室  
真住貴子(教育普及室長・主任研究員)  
吉澤菜摘(主任研究員)  
山際真奈(研究補佐員)  
今井祥子(研究補佐員)  
杉本雅晃(事務補佐員)

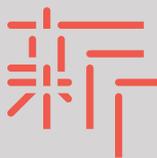
デザイン 大島武宜(表紙)  
デザインオフィス・スパイク株式会社(本文)

制作 能登印刷株式会社

発行 国立新美術館  
〒106-8558 東京都港区六本木7-22-2

発行日 2022年3月31日

©2022 国立新美術館



THE NATIONAL  
ART CENTER, TOKYO

国立新美術館